

## 2026 年度 福島フィールドワークを実施して 人間科学研究科教授 村本邦子

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災を受け、人間科学研究科の前身である応用人間科学研究科に「東日本・家族応援プロジェクト」を立ち上げた。細く長く、十年に渡って東北に通い続けて「被災と復興の証人になる」というプロジェクトである。ちょうど十年目がコロナ禍と重なり、この年はオンラインで現地と繋いで、翌年を最終年として 11 年間、このプロジェクトを続けた。福島については「被災と復興の証人」の役割を終えられる状況ではなく、その後も続けてきた。団士郎家族漫画展やさまざまな対人援助のプログラムを持って現地の受入機関と協働してプログラムを開催する「家族応援プロジェクト」の形は 2025 年までとし、今年からフィールドワークのみになった。また、これまで大学院生のためのプログラムとしていたが、今年より学部生も参加できるようにした。そして、新しいメンバーとして安田裕子先生が加わった。

毎年、シンポジウムを開催しているが、今年は 15 年を振り返り、「東日本・家族応援プロジェクト」の総まとめを予定している。そこで、福島フィールドワークの前の日程で、これまでこのプロジェクトに参加したことのある博士課程後期課程の院生 5 人とともに東北 4 県（青森、岩手、宮城、福島）を巡り、これまで協働してきた人々や機関を訪れ、振り返りの座談会を持った。私はその後、福島県内の関係施設と関係者を取材して回り、福島フィールドワークのメンバーと合流、新しくなったプロジェクトがスタートした。

フィールドワークは、9 月 2 日（水）から 4 日（金）の二泊三日で、南相馬市小高区にある双葉屋旅館に宿泊し、「おれたちの伝承館」館長の中筋純さんのコーディネートで行われた。学生・院生たちも自分たちでフィールドワークする時間も欲しいだろうと、1 日目は東日本大震災・原発災害伝承館を含む周辺を個人やグループでフィールドワークした後、夕方、合流し、「おれたちの伝承館」に行くという予定にした。その後、中筋純さんの案内で伝承館を見学し、敷地内に併設されている放射能測定所を訪れ、所長の白髭幸雄さんのお話をお聞きした。夜は、双葉屋旅館の女将・小林友子さんのお話を聞かせて頂いた。

二日目は、大熊町の木幡ますみさんの案内で大熊町を見学して回った。駅前商店街跡を訪れ、まだ建物が残っていた頃の中筋さんのパノラマ写真と見比べながら、木幡さんのお話を聞いた。また、中間貯蔵地（正式には「中間貯蔵施設」と呼ぶようだが、どう見ても施設には見えないためなのか、現地の方々はこう呼んでいた）を見た後、富岡復興メガソーラー SAKURA を見学し、管理者である猪狩洋一さんのお話を聞いた。車中から双葉町帰還困難区域も見た。その日の夜は、皆で振り返りの時間を持った。

三日目は、浪江町棚塩地区のイノベーションコースト構想諸施設を見学し、浪江町請戸海岸から第一原発を遠望し、長者原からドローンを飛ばして第一原発と中間貯蔵地を見た。それから、楡葉町宝鏡寺のヒロシマ・ナガサキ・フクシマ・ビキニ伝言館を訪れ、館

長である安齋育郎先生（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）のレクチャーを聞き、展示の観覧をした。最後は、いわき湯本温泉古滝屋旅館にある原子力災害考証館を見学し、館長である里見喜生さんのお話をお聞きした。

私自身は16年目の福島となるが、毎年変化していく光景を見、人々のお話を聞くたびに、事態はより複雑で困難になってきているのではないかと感じている。学生・院生たちは、事前学習をしてきたものの、初めて見聞する福島の状況に衝撃を受けていた。これから事後学習を重ねて12月のシンポジウムの報告となる。1回の訪問でつかめることは限られているが、足を運べば運ぶほど語ることが苦しくなり言葉を失いそうになることも事実である。ある語り部の方が、「伝えるというのは心に傷を残すこと」とおっしゃったそう。そうなのかもしれない。いまだ解決しない現在進行形の問題についてはとくにである。それでも、それぞれが現地で受け取ってきたメッセージを、今現在できる限りで自分なりの言葉にして伝え、議論を拡げていくことが「証人」としての責任でもある。

毎年暖かく私たちを迎え入れ、社会へのメッセージを託してくれる福島の土地と人々に感謝しつつ、ささやかながらここに今年度のフィールドワークの記録を残したい。



大熊町長者原から福島第一原発と中間貯蔵庫施設を臨む（2026年9月4日中筋純氏撮影）

2026年度「福島原子力災害フィールド実習」に同行して

総合心理学部教授 安田裕子

2011年3月11日に起きた東日本大震災から15年以上もの歳月を経て、現在、その町並みには復興がとらえられる。しかしその一方で、草が生い茂っているような道脇の一带や、自動車で山のほうに入って行ったところでは、線量計がピーピーと鳴り響く。長い年数をかけてさまざまに整備がなされ生活を再建してきたそのなみなみならない尽力に想いをはせ敬意を払いつつ、一方で、回復しようもない現場、いまだ残されている爪痕があるという現実を突きつけられる。そして、「復興」が前景化するなかで、そうした置き去りにされていることが見えにくくなっているということ、知ろうとしなければ知らないで済んでしまうことがあることを—しかしそれは今後に及ぶ恐ろしいことである—、思い知らされる。

このたびの2泊3日の「福島原子力災害フィールド実習」では、大熊町、双葉町、浪江町、楡葉町、いわき市の各現場を訪問した。実習内容としては、①原子力災害の爪痕がとらえられる現場を実際に観て回ること、②各種施設見学、③講話の聴講、と整理することができる。

原子力災害の爪痕がとらえられる現場には、おれたちの伝承館の中筋純氏の運転により自動車で案内いただいた（①）。車窓から、あるいは遠景として眺めることも含めて、さまざまな現場に足を向けた。具体的には、駅前商店街跡、双葉町図書館や旧の双葉町役場庁舎（いずれも現在は閉館）、大熊町放射性廃棄物仮置き場、大熊町や双葉町の帰還困難区域、新福島変電所、浪江町立請戸小学校、などである。実際に現場に出向くことで、身体がセンサーのようになって、わかることがある。たとえば駅前商店街跡は、店の建物は現在ではすっかり撤去されていて、「跡」と言っても跡形もない。写真家でもある中筋氏が撮影した、商店街があった頃の写真を横に長くつなげて絵巻物のようにしたものを広げて、見せていただく。店が横に並ぶ商店街の写真を視点を移動させながらじっと眺めては、目の前の風景に視線を移す。そしてそこには何もないという落差。思わず、そうした行為を何度か繰り返してしまった。なかなか言葉にしにくいけれど、身体で感じられることがある。さて、現在は使用されていない双葉町図書館は、閉館が決まった後に、希望する町民に所蔵されていた図書が譲り渡されたとのことだが、線量が低いとはいえないその現場に、親子たちは何の防御もしない半袖姿などで本を取りに現れたのだと、中筋氏からうかがった。危険とも安全とも考えをもたないままに、図書館に喜んで本を取りに来る親子の笑顔が頭をかすめる。中筋氏は、希望者への譲渡を呼びかけるチラシに、その場所の危険性について何ら記されていなかったことに懸念を示す。そして、旧の双葉町役場庁舎もやはりそのままに建物が残されていたが、その向かい側に置かれていた時計台の針は、いまだ14時46分を指したままであったことに衝撃を受けた。震災の遺構として残されている

ものではなく、まさにあの発災の瞬間から、15年以上もの間ずっと時間が止まっているのである。まるで置き去りにされたような、「復興」とは縁遠いこの場の光景に、なんとも言えない気持ちになる。実際に現場に出向けば、頭で考えることとは異なる学び方がある。なお、原子力発電所に距離的に近づくことは困難であるが、第一原子力発電所を、浪江町請戸海岸などから遠景として眺めたり、中筋氏に飛ばしていただいたカメラ付きドローンを通じて、見ることができた。

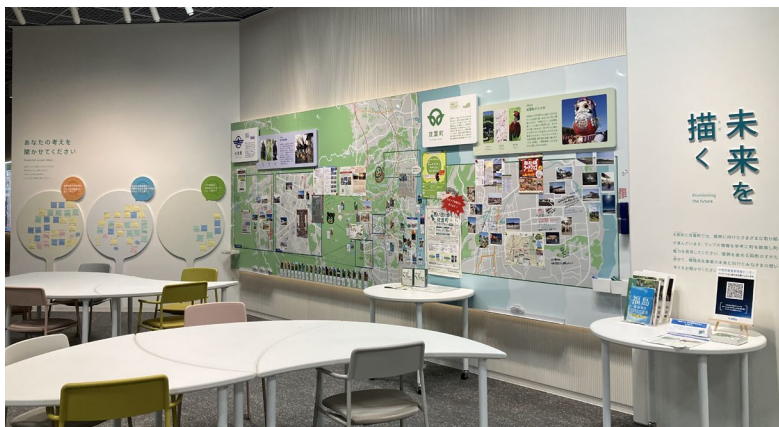


駅前商店街跡と商店街の写真



旧の双葉町役場庁舎前の時計台

施設見学をしたのは、東日本大震災原子力災害伝承館（双葉町）、おれたちの伝承館（南相馬市）、中間貯蔵事業情報センター（大熊町）、宝鏡寺・伝言館（楡葉町）、原子力災害考証館（いわき市）である（②）。いずれの施設も、展示資料や展示物が豊富であったが、その展示内容はもとより、何に焦点を当てどのように伝えようとしているのか、という点において、それぞれに固有の特徴がある。大きくは、公的につくられた施設か、民間がつくった施設かによって、分けることができる。村本・河野（2022）は、福島における民間のミュージアムの動きは、それぞれが独自の視点を持ち、原発事故の早急な収束という大きな物語へ抵抗していると位置づけられる、と述べている。福島原子力災害フィールド実習における私の目標のひとつに、各施設がどのようなスタンスで資料を提示しているのか、という観点で各施設を巡る、ということを掲げていた。しかし、そもそも展示資料等を十分に閲覧することができなかった。各施設を再度訪問して、まずは内容を理解するところから、引き続き学びを深めていきたい。



中間貯蔵事業情報センター



おれたちの伝承館

そして、こうした施設内外で、東日本大震災にまつわる体験や現在に至る福島での活動に関する講話をいろんな方からうかがったことも、とても貴重な経験だった（③）。東日本大震災原子力災害伝承館の語り部のひとりである高村美春氏、おれたちの伝承館に併設されている放射能測定所の所長である白髭幸雄氏、宿泊先である双葉屋旅館の女将である小林友子氏、2日目のフィールドワークに同行くださった大熊町町議の木幡ますみ氏、富岡復興メガソーラー・SAKURA で働く猪狩洋一氏、伝言館の館長である安齋育郎氏、原子力災害考証館の館長である里見喜生氏から、お話をうかがった。事前学習にて村本先生が「誰から話を聴くかによって見えてくることが異なる」と述べられていたことが、まさにその通りで、現実をそれぞれのさまざまな観点から多面的にうかがうことができた。東日本大震災が起こった当時の、情報がなかった中で、あるいは五月雨式に伝えられる情報に翻弄され、生活の基盤がなし崩しになった日々を過ごしたこと（高村氏）。線量の高さが明確にされていない山に入り線量を測定してデータをまとめ、安全神話に警鐘を鳴らす活動を行っているということ。それは、過去に原子力発電所に勤務して生活を成り立たせていたことへの贖罪の気持ちによるということ（白髭氏）。太陽光発電の特長と近未来の課題をうかがい質疑応答のなかで明らかになった、避難した町民が戻ってこないことによる地域におけるメガソーラー事業の行き詰まり感。そして、そのやりとりする様子から少なからず感じられた、ご自身が取り組んでいることの意義への懸念と孤独感（猪狩氏）。原子力発電の危うさを長きにわたり訴えるもそれが生かされずに原子力発電所事故が起こった

ことへの強い憤りと無念。そこから、二度と同じことを繰り返してはいけないという想いをかたちにしてきた活動と明確なメッセージ性が付与された資料の数々（安齋氏）。それぞれのお立場からお聴かせいただく話は総じて、感情が強く揺さぶられながら、複眼的に現場を見る眼を養う経験となった。



伝言館・館長 安齋育郎氏による講話

東日本大震災による福島原発事故は、安全への過信、知らないでいること—安心を得ることとの引き換えであることもある—、知らされていないこと—情報が隠されていることもある—が、いかに恐ろしいことであるかを明らかにした。このたびの「福島原子力災害フィールド実習」では、覆われてしまっていた／しまっている現実があることを知り、そしてそうした現実をさまざまな角度から見聴きすることができた。教員として本実習に同行するという立場であったが、個人的には学ぶ機会をいただいた想いである。参加学生と院生が発表する事前学習での学び、実習2日目にみんなで行ったリフレクション、そして、事後学習として共有するなかでこれからさらに学びを深められるということ。関心を持ち続け、気づきと学びを掘り下げ、それぞれの当事者性を大切にしながら共有し、そこからまた自身の学びを更新して、次なる課題を設定してはまた前に進んでいくということ。もともと、自身の学びのみならず、社会への還元を考えていく必要がある。視点を増やし、現実を複眼的にとらえ、あれかこれかではない道を探っていきながら、自身の学びと社会の変革を並走させていけるように、引き続き課題に向き合っていきたい。

#### 引用文献

村本邦子・河野暁子. (2022). 福島における原子力災害のフォーラムを育む—抵抗する民間のミュージアムの可能性. 立命館平和研究：立命館大学国際平和ミュージアム紀要, 23, 43-52

## 福島フィールドワークで気づいた「知らない」ということ

総合心理学部総合心理学科 3 回生 大保実菜

今回の福島フィールドワークに向けて、私は福島第一原発事故による「母子避難」と「自主避難」について調べていた。特に関心を持っていたのは、なぜ母子避難という状況が生まれたのか、そして、なぜ避難せざるを得なかった人々の避難が「自主避難」と呼ばれるのかということだった。事前学習では、原発を「犠牲のシステム」という視点から考えることについても学んだ。原子力発電によって作られた電気を利用する人々がいる一方で、原発が立地する地域の人々は、その危険や負担を引き受けることになる。私はこの構造について考えながら、実際に現地で話を聞き、町の様子を自分の目で見たいと思っていた。また、資料から分かることと、現地で初めて分かることは違うのではないかと考えていた。特に、避難を決めた人々が当時どのような思いを抱えていたのか、家族や地域との関係がどのように変化したのかについて知りたかった。

### 高村さんのお話から考えた「自主避難」

写真 1 東日本大震災・原子力災害 伝承館



9月2日には、語り部の高村さんから「あの日、あの時の出来事」についてお話を伺った。特に印象に残ったのは、震災当時、避難すること自体に迷いがあったというお話である。自分たちは家を流されたわけではなく、他の人と比べれば被害も少ない。そのような状況で、自分たちも避難してよいのだろうかという思いがあったという。また、原発から25kmという距離がどれほど危険なのかも分からず、原発事故の被害がこれほど長く続くとは思っていなかったという。数日ほど家を離れればよいと思って避難したものの、食料やガソリンも十分になく、避難生活は長期化していった。私はこのお話を聞いて、事前学習で抱いていた「自主避難」という言葉への疑問を改めて考えた。「自主」という言葉だけを見ると、本人が自分の意思で自由に避難を選んだようにも感じられる。しかし実際には、原発事故によって危険が生じているにもかかわらず、その危険性を判断するための情報が十分でない状況だった。避難することにも、避難しないことにも不安があり、その中で判断を迫られていたのである。さらに、避難先では福島出身であることを理由に差別やいじめを受けた人々もいたという。福島ナンバーの車であることを理由にガソリンを入れてもらえなかったというお話もあった。

原発事故によって住み慣れた場所を離れざるを得なくなったうえに、避難した先でも差別を受ける。そのような状況を知り、私は、原発事故による被害は放射線そのものだけで

はないことを改めて感じた。事前学習では、母子避難によって家族が離れて暮らすことや、避難後の生活にさまざまな負担が生じることについて調べていた。しかし、実際にお話を聞くことで、避難するという決断に至るまでも、多くの迷いや不安があったことを知った。避難したという結果だけを見るのではなく、その人がどのような状況に置かれ、何を考えながら判断したのかを知る必要があるのだと思った。

## 何を語り継いでいくのか

今回、もう一つ印象に残ったのは、語り継ぐことの難しさである。高村さんからは、震災について語っていても、周囲から怖がらせるようなことは言わないでほしいと求められたり、聞く側が美談を期待していたりすることがあるというお話を伺った。私はそれを聞いて、語り継ぐとは一体何を残すことなのだろうと考えた。事前学習では、「大きな物語からこぼれる一人ひとりの声」という言葉が印象に残っていた。今回、実際にお話を伺ったことで、その意味をより深く考えるようになった。「復興」という言葉だけでは、避難によって家族が離れて暮らすことになった人や、故郷に帰りたくても帰れない人など、それぞれの経験を十分に表すことはできない。語り継ぐ際には、聞く側が望む話だけではなく、語りにくいことや、簡単には整理できない複雑な思いにも目を向ける必要があるのではないかと思った。

## そこにあったのに、見えていなかったもの

写真2 帰還困難区域内の木幡さんのご自宅



写真3 崩壊したままの住宅



9月3日には、木幡さんのお話を伺った。震災当時、道路にはひびが入り、避難を促す放送があっても、耳が遠い人にはその情報が届かなかったという。また、原発や放射線についての知識がなければ、危険性を理解すること自体が難しかったというお話もあった。私は、災害についての知識や情報が不足していることが、被害をさらに大きくする可能性について考えた。どれほど危険な状況であっても、その危険性を知らなければ、適切な行

動を取ることは難しい。さらに、情報が発信されていたとしても、それを受け取れない人もいる。情報を伝えることと、必要な人に情報が届くことは、必ずしも同じではないのだと思った。また、帰還困難区域に関するお話も印象に残った。故郷に帰りたいたいと思っている高齢者の方がいる一方で、震災から時間が経過した後は、帰還困難区域に車や電気製品などを捨てに来る人もいうという。住んでいた人々が帰ることのできない場所が、外部の人にとっては不要なものを捨てる場所になってしまう。そのことに強い憤りを感じた。

写真4 街中にある放射線の観測器



一方で、私自身も現地について知らなかったことが数多くあった。今回、特に印象に残っているのが、町のさまざまな場所に設置されていた放射線の観測器である。観測についてのお話を聞くまで、私は何のためのどういう装置なのかわからなかった。観測器は、私が気づく前からそこにあった。しかし、私は説明を受けるまで、その装置について何もわからなかった。この経験から、現地に行けば自動的に何かが分かるわけではないのだと感じた。同じ場所にいても、何を知っているか、何に関心を持っているかによって、見えるものは変わるのだと思う。

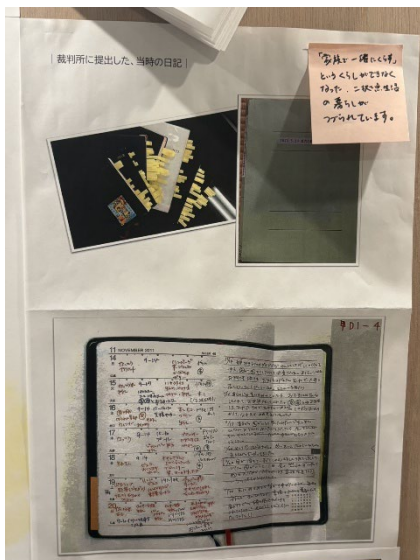
私はフィールドワークに参加する前、現地に行くことで、資料を読むだけでは分からないことを知りたいと考えていた。実際に訪れたことで多くのことを知ることができたが、それと同時に、知らないことがどれほど多いのかも気づかされた。そして、知らなかった理由を、単に知る機会がなかったからだとすることもできないと思った。自分自身がこれまで積極的に知ろうとしていなかったこともあるからである。福島が震災前にどのような場所だったのか、震災によって何が変わったのか、現在どのような暮らしが営まれているのか。外部にいる私たちは、知ろうとしなければ、その変化に気づくことさえ難しいのだと思った。

## 原子力災害考証館で見た母子避難

写真5 考証館内のポスター



## 写真6 考証館内ポスター2



3日目に訪れた古滝屋の原子力災害考証館では、「母子避難と関西訴訟」に関する展示を見学した。私は事前学習で母子避難について調べていたため、今回のフィールドワークの中でも特に関心を持っていた展示だった。展示では、避難指示区域の内外によって、避難した人々が受けられる賠償や支援に違いがあることが示されていた。原発からの距離や行政による区域の指定によって、避難する際の負担や、その後の生活に対する支援が異なっていたことを知った。特に印象に残ったのは、当時の日記や、家族が離れて暮らすことになった生活についての記録である。展示には、『家族で一緒にくらす』というくらしができなくなった」という言葉があった。

事前学習では、母親と子どもが避難し、父親が仕事などのために元の地域に残ることで、家族が離れて生活することや、二重生活による経済的・心理的な負担が生じることを学んでいた。しかし、実際に当時の日記を目にすると、母子避難が単に家族の居住地が分かれるということではなく、それまで当たり前だった日常が失われることでもあるのだと感じた。また、避難するかどうかを自分で決めたという理由で「自主避難」と呼ばれていても、放射線への不安を抱えながら子どもの健康を守ろうとする人々にとって、どれほど自由な選択だったのだろうかと改めて考えた。私は事前学習で、なぜ母子避難が必要になったのか、そしてなぜ「自主避難」という言葉が使われるのかという疑問を持っていた。今回の展示を通して、避難したという結果だけでなく、避難によって失われた家族の日常や、避難後も続く生活上の負担に目を向ける必要があると感じた。

## 故郷を残すこと、語り継ぐこと

今回のお話の中で、「故郷は安全な場所ではないが、安心できる場所である」という言葉が特に心に残っている。放射線への不安があり、以前と同じように安心して暮らせるとは限らない。それでも、長年暮らしてきた故郷には思い入れがあり、簡単に離れることのできない気持ちがあるのだと思った。また、これから先の地域の存続についても考えた。昔から住んでいる人々は、自分たちの町や村を残そうと努力している。しかし、若い世代が都市部へ移り住み、高齢化が進めば、地域を維持していくことはさらに難しくなるのではないだろうか。

今回のフィールドワークを通して、復興とは、建物や道路を整備することだけではないのだと感じた。そこに暮らす人々がどのように生活していくのか、地域の歴史や人々のつながりをどのように残していくのかという問題もある。そのような中で、語り継ぐことには大きな意味があるのではないかと思った。もちろん、語り継ぐことだけで、失われた町

や人々の生活を取り戻せるわけではない。しかし、かつてその場所にどのような暮らしがあり、震災によって何が変わったのかを残すことはできる。そして、それは被害の大きさや復興の成果だけを伝えることではないと思う。避難することに迷った人、故郷に帰りたい人、帰ることのできない人、今もさまざまな問題を抱えている人など、それぞれの経験や思いを知ることも大切なのではないだろうか。

## フィールドワークを終えて

今回のフィールドワークでは、事前に関心を持っていた「母子避難」と「自主避難」について、実際に現地でお話を伺いながら考えることができた。避難するしかないと思う一方で、自分たちは避難してよいのだろうかと迷っていた人々がいたことを知り、「自主」という言葉だけでは表すことのできない状況があったのだと感じた。事前学習では、母子避難によって家族が離れて暮らすことや、経済的・心理的な負担が生じることを学んでいた。しかし、実際に展示を見ることで、それまで家族で過ごしていた日常が失われ、その影響が避難後の生活にも続いていることを、より具体的に考えるようになった。原発事故による被害は放射線そのものにとどまらず、家族や地域の分断、差別、故郷に帰ることのできない状況など、さまざまな形で続いていることも学んだ。

しかし、今回最も強く印象に残っているのは、自分自身がこれまで知らなかったことの多さである。町に設置されていた放射線の観測器にさえ、説明を受けるまで知らなかった。そこにあるものでも、自分が知らなければ見えていないことがある。私は今回、福島について十分に理解できたとは思っていない。むしろ、現地を訪れたことで、自分がまだ知らないことが数多くあるのだと気づいた。だからこそ、今回の経験を一度きりのものにせず、これからも知ろうとし続けたい。そして、語り部の方々のお話を、自分が聞きたい一つの物語にまとめてしまうのではなく、それぞれの人が置かれていた状況や、簡単には整理できない思いも含めて考えていきたいと思う。

今回のフィールドワークは、福島について新しい知識を得る機会であると同時に、私自身にとって、「知る」とはどういうことなのかを考える機会にもなった。

## 福島フィールドワークに参加して 総合心理学部 3 回生 竹原花音

15 年前の 2011 年 3 月 11 日。「3.11」とも呼ばれるこの日は、東日本大震災が起きた日である。私は今回、15 年前の記憶を辿るようにして、福島の地をめぐった。3 日間のうち、一番印象的だったのは、初日に起きたことだった。

### 事実を伝えたい。知ってほしい。

初日、私が伺ったのは『東日本大震災・原子力災害伝承館』で語り部活動を行っている高村美春さんの話だった。南相馬市出身の彼女が震災当時、実際に経験したこと、避難後、実際に感じたことを何 1 つ包み隠さず伝えてくれた。国の対応、東京電力の対応、地域の分断…。聞けば聞くほど、腹立たしく、悔しい思いが込み上げてきた。なぜ？ どうして？ちゃんと住民に伝えられていないのか。情報が遅れているのか。その場所に住んでいる人にはそれを知る権利があるだろう。それなのになぜ。でも、今でもそのような知識や情報の遅れは様々なところで問題になっている。あれだけ大きな災害が起き、多くの犠牲者を出したのに。どうして学ばないのだろうか。自然災害に対して人間は無力だというけれど、できることはあるはずだ。彼女は「**伝え続けなければ忘れられていく**」と力強く話していた。本当にその通りだと思う。

『東日本大震災・原子力災害伝承館』には、訪れた人のコメントがたくさん掲載されたパネルボードがあった。当然のことながら、当時被災した人、震災時点では生まれていなかった人、年代も性別も出身地もバラバラな人たちだ。そんな人たちのコメントの中で「忘災」という言葉が目についた。災害を防ぐことは「防災」。でも、忘れてしまったら「忘災」になる。当たり前のことだった。でも、文字で見ると苦しかった。「**正しいことを、正しく、すばやく伝える**」。このことがちゃんと行われていたら、もしかしたら、15 年前の犠牲者はもっと少なくて済んだのかもしれない。

### 人が生きる。人がつながる。

3 日間、15 年前の記憶を辿るようにしてフィールドワークを行なった。「苦しい」という思いの方が強かった。でも、大きな震災があったとしても強く、しなやかに生き続け、暮らし続けている人もいる。人は、弱い。一人では生きていけない。でも、誰かと手を取り合い、誰かに経験を伝え、進んでゆく。そうすれば、人は生きていける。**人と人とがつながれば、苦しい経験はいつか大きな希望になる**。そのことを福島で出会った人たちは教えてくれた。日本は世界有数の地震大国だ。東日本大震災だけではなく、この長い歴史の中で、大きな震災は何度も経験している。だからこそ、綺麗事だけでなく、苦しいこともたくさん知っている。その知識と、経験を、後世に繋ぎ、伝えることが今の日本に生きる私たちの使命なのかもしれない。

## 2026 年度福島フィールドワーク活動報告

総合心理学部 3 回生 宮崎空

### はじめに

今回、私は 2026 年 9 月 2 日から 9 月 4 日の間、福島でのフィールドワークに参加させていただきました。メディアでは語られることの少ない復興の現状や現地の人の実際の声を聞き、証人として語れるようになることを目的として福島に訪問しました。3 日間という短い時間ながらも、新たな発見ばかりで驚くことが多くありました。この活動報告では、フィールドワークで、印象に残ったことを中心に、現地の方の語りを交えながらまとめたいと思います。

### 福島復興の現状

報道などでは、ポジティブな復興の様子が大きく取り上げられることが多いように感じます。今回の活動に参加するまでの自分の目には、お祭りの再開やきれいに整備された街の様子などから、復興は完成に近づいているように映っていました。しかしながら、実情は複雑なものでした。



東日本大震災後再開されたお祭り

### 1. 現在も続く除染作業

震災後、年内には除染作業が始められました。しかし、現在除染が行われているのは、主要な道路や施設の周りなど、一部にすぎません。放射線量の低い場所がある一方で、いまだ立ち入りが規制されている場所が多くありました。田畑や山林などはいまだに除染がされず、放置されている状態の場所が多かったです。特に、山林では、除染作業にかかる時間や労力、安全性の観点から除染作業が進んでいないという現状があるようでした。そのため、震災前には盛んであった林業や農業は制限せざるを得ない状況となっていました。

現在、福島の中間貯蔵施設には、除去された土壌などが集められています。これらの除去土壌などを 2045 年までに福島県外へ搬出し、最終処分するという計画があることを東日本大震災・原子力災害伝承館の展示を見て知りました。しかしながら、本当に 2045 年までに受け入れ先が見つかるのかという懐疑的な声も現地ではあがっているようでした。



山沿いの道の放射線量

### 2. 放射線に対する現地の考え

フィールドワークを通して、福島にルーツのない人と比較して、福島で暮らしてきた

方々は放射線の問題に対して強い関心を持っているように感じました。今回、フィールドワークでお話を伺った方々の多くは放射線に対して知識をつけ、身を守りつつ、福島のために活動されていました。東日本大震災・原子力災害伝承館の語り部の方はご自身の被災経験とともに放射線に関する知識についても語り部活動の中でお話しされていました。その一方で、過去の経験から放射線のことを考えたくない人や福島の評判を考えて、放射線について語るべきではないと考える人もいたようでした。放射線に対する姿勢は住民の中でも様々で、どの立場の人も否定することはできません。だからこそ、放射線の問題は複雑で繊細なものになっているのだと感じました。

### 3. 街並みの変化

東日本大震災や原子力災害によって、破壊されてしまった建物や立ち入ることのできない場所が生まれてしまいました。その一方で、現地では復興に向けて元の街並みを残しながらも、新たな家やスポットが生まれ始めていました。今回のフィールドワークで宿泊させていただいた双葉屋旅館は震災前から続いている旅館でしたが、双葉駅周辺では、震災前からある建物を取り壊し、新たな街をつくっていく過程を見ることができました。また、内部被ばくを検査できる設備を持った病院が建てられているなど、多くの住民にとって、役立つ施設も新設されていました。しかしながら、海沿いの請戸小学校近くには、パークゴルフ場が新設されたことについて、「わざわざここに作る必要があったのか」という声も現地の方から伺いました。このように、放射線量の問題が残る中でも、新たな家や施設ができ、街がつくられていっていました。

### 4. 世代間の価値観のギャップ

今回のフィールドワークでは、福島出身の方や長く福島で暮らしている方のお話を聞くことができました。浜通りの各地を巡る中で、近年新しく作られた施設やスポット、景観などを見る機会も多くありました。その際に、それらの景色を見て、「若い人たちはこういうのがあったほうがいいんだろうね」と複雑な心境を思わせるような言葉を口にされていました。そのほか複数名の方も若い世代との価値観の違いを感じているとおっしゃっていました。世代間のギャップにどのように対応していくのかということがこれからの復興にとって重要な課題になっていると感じました。

### おわりに

フィールドワークに参加させていただいたことで、これまで漠然としか知らなかった福島の現状が少しながら解像度を高めて捉えることができるようになりました。メディアから得られるまとまった情報だけでは知ることのできない住民一人ひとりの声を聞き、葛藤や復興の進め方の課題を、現地の方々がどのように捉えているのかを知ることができました。

また、現地の景色や、そこで暮らす方々のお話に触れる中で、それぞれの立場から自分の意見を主張する姿が、私がこれまで見てきた地域よりも強く表れているように感じました。それほど福島で暮らしてきた方々にとって、東日本大震災や原発事故、そして復興に対する一人ひとりの思いが強く、さまざまな考えが存在しているのではないかと考えました。一方で、復興に対する考え方が異なるからこそ、地域の中で摩擦や葛藤が生まれることもあるのだと思います。

今回のフィールドワークを通して、復興とは、単に街を新しく整備することではなく、そこに暮らす人々がそれぞれの思いを持ちながら、これからの地域のあり方を考えていく過程でもあるのだと感じました。異なる価値観を持つ人々が暮らす中で、どのように互いの考えを受け止め、新しい地域をつくっていくのかという今回現地で感じた葛藤や気づきについて、今後も考えていきたいと思っています。



現地の方の主張が書かれた張り紙と看板

## 福島フィールドワーク 総合心理学部 4 回生 玉島悠成

### はじめに

私は兵庫県に生まれ、現在大阪で暮らしている。今回のフィールドワークで初めて東北地方を訪れることになった。福島第一原子力発電所の事故から 15 年が経過し、日々見ているニュースから福島は生活が取り戻されていると思っていた。3 日間のフィールドワークでは訪問前に抱いていたイメージと異なることの連続であり、事前の机上学習だけで学んだことはほんの一部に過ぎなかったと感じた。

### 1 日目：南相馬を歩いて

私は 9 月 2 日の朝南相馬のバスターミナルから原ノ町駅まで 1 時間ほど歩いた。朝早かったため住民の姿はあまりなかった。太陽光発電のパネルが設置されている場所がいくつかあった。住宅街と田地が並んでおり自然豊かな場所という印象を受けた。



写真 1：南相馬市の道路

### 1 日目：双葉駅に着いて

大野駅まで乗り過ごしてしまい 1 時間ほど待合室で休憩してから双葉駅に到着した。企業研修を受けている方々も一緒に休憩されていた。私もこれから彼らと同じように学ぶ意識を持って双葉駅に向かった。



写真 2：大野駅のホーム

### 1 日目：原子力災害伝承館にて

机上学習の中で原子力は未来のエネルギーとしてしばしば紹介されていたことを学ん

だ。浪江中学校に掲示されていた東京電力主催の習字コンクールの作品があり、「原子力の利用」という言葉が展示されていた。新しいものを受け入れる際には教育が用いられることがここからわかる。また、除染の実施状況についての展示を見た。汚染状況重点調査地域の住宅が418,897戸、道路が20,476キロメートルなどの記述があり衝撃を受けた。途方に暮れるような規模での作業と多量の放射線に被曝するリスクを考えるだけで身の毛がよだつ思いをした。

また、防護服の展示がされていた。一見すると放射線から身を護ることができる特別な服なのではないかと感じる。しかし実際は、放射線の侵入を防ぐのではなく、放射性物質が衣類や体に付着しないようにするためである。完全に被ばくを防ぐ手段はなく、除染作業は身体的・精神的な負担を強いることになる。



写真3：原子力災害伝承館の展示

さらに、語り部の高村美春さんから貴重なお話を伺った。経験していない私たちにとってみれば帰宅困難区域や避難指示解除区域などのような区域を地図上で確認するため生活が取り戻されていると考えてしまう。福島第一原発事故の発生から20キロメートルや30キロメートルなどの基準などが設けられている。しかし、実際に地図上の線が目に見えて現場に引いてあるわけではない。そのため、高村さんが生活している地域がどの区域に該当しているのか一目ではわからないようだ。またそうした情報は一部の人にのみしか知られておらず錯乱していたようだ。はじめは2日ほどの日なんだと想定していたが実際は帰還するのに数年、あるいは現在も帰還できていない人もいるという現実がある。高村さんは、一時的に避難するために車に乗り西へと車を走らせた。猪苗代町のあるコンビニでガソリンが切れてしまったそうだ。バスが通り過ぎていくのを見ることしかできず途方に暮れていたと語っていた。家族とも一時的に離れることになり、深い悲しみを負うことになった。福島第一原発事故は技術的な問題や帰還者数の推移などのマクロな視点でのニュースを見ることが多いが、一人の人間の半生を聴く機会は大変貴重だった。ネットニュースにも載っているかもしれないが、涙ぐんだ生きた声で叫びを聴き、心が動かされた瞬間だった。

## 1日目：おれたちの伝承館

原子力災害伝承館を見学し、様々な事実を目の当たりにした。その後中筋純さんが館長を務めるおれたちの伝承館を見学した。最も印象に残ったものはやはり空間の真ん中に寝

そべることができる場所があり、上を見上げて鑑賞するコーナーだ。復興に向けての期待感を持つと同時に戻り切らない地域住民の営みの虚しさを感じる時間だった。

また、復興に対する世間のイメージと現場の乖離を感じさせる写真の展示があった。祭りを再び始めた瞬間を切り取った写真で、メディアや世間に伝わるイメージとしては復興の道をたどっているということだ。もちろんそうしたイメージが産業の復興に繋がっている部分がある。しかし、メディアが切り取った写真だけがすべてではないということも同時に感じた。もう一枚の写真には、祭りの参加者の周辺に中間貯蔵施設が並んだ風景が広がっていた。さらに、「原子力 明るい未来のエネルギー」という標語の看板についてのお話も伺った。撤去作業の際に「未来」の2文字が外れなかったらしいのだ。あくまで個人的な感想だが、原子力は未来のエネルギーという神話が崩れたことを受け入れ、未来へと歩み続けることを示唆しているのではないかと感じた。

また、おれたちの伝承館に併設されている施設では線量を測定し、マッピングするなどの研究をされている。そこで伺った話では、キノコを採取し線量を測定するのだが、ナイロン製の袋に入れて運ぶそうだ。福島第一原発事故で放出された放射線は $\beta$ 線や $\gamma$ 線と呼ばれるものは多く、鉛や厚い鉄の板などでなければ防ぐことができない。事故から15年が経過し、住民にとっては放射線は正しく恐れる存在として捉えられていることを感じた。しかし中にはイノベーションを推進する外部の組織が参入を試みており、放射線について十分に考慮されていない提案を受けることもあるそうだ。

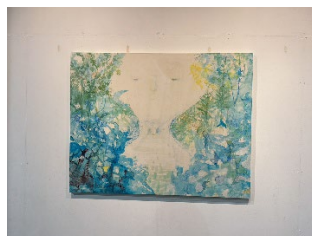
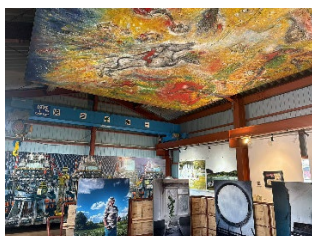


写真4：おれたちの伝承館の展示

## 1日目：双葉屋旅館にて

おれたちの伝承館を見学した後近くの双葉屋旅館で宿泊した。自然を感じる温かい食事をご用意していただいた。食事を終えると2階の大広間にご案内していただいた。そこでは旅館の女将として切り盛りされている小林友子さんのお話をお伺いした。お話を重ねるごとにさまざまな挑戦と小高への熱い思いを感じる方という印象を受けた。

震災の時、旅館建物への地震の被害は少なく、今も残っている。2011年3月12日、地震発生の翌日から避難生活を余儀なくされ、名古屋まで避難されたそうだ。身銭を切る生活が続き、再就職を試みるも断られた。そうした苦難を経て、徐々に復興へと向かっていく。2013年から旅館の修繕が始まり、通常よりも工期が遅れながらも2015年に完成した。双葉屋旅館は第一原子力発電所から直線距離で15～20キロメートル離れた地点にあったため放射線に汚染されているかどうかの厳しいチェックがされ、排出されるごみ等を

20 キロメートル圏外に自由に持ち出すことができなかったそうだ。

小高をはじめとする被災地の復興に力を入れていたそうだ。住民の方が作った編み物な度を販売する場所の提供や馬車を走らせる計画もあったそうだ。放射性物質であるセシウムが油に滞留しづらいという性質を使い菜種油から石鹼を製造している。活動は福島に留まらずウクライナのチェルノブイリにまで拡げている。学校に訪問した際には、子どもたちは、福島第一原発事故に関する授業に取り組んでいた。小林さんは被災からの復興に向けて内と外に取り組んでいる。



写真 5：双葉屋旅館での食事

## 2 日目：浜通りを街歩きして

大熊町議の木幡ますみさんが同行して大熊町と富岡町をご案内していただいた。写真 6 は被災以前は酒屋だった。復興に向かって場所とそうでない場所との差を大きく感じる機会になった。



写真 6：双葉町の車窓から見た景色

住民に十分な説明がなされないまま取り壊しが決まった双葉町役場旧庁舎を見学していた。同行していたおれたちの伝承館の館長を務めている中筋さんがとある話をしてくださった。双葉町役場旧庁舎でイベントが以前実施されたが線量が高い数値を出す場合があった。母親が小さい子を抱きかかえて旧庁舎に入っていたらしいのだ。復興していると断言することの難しさと復興できていないと公表すると生じてしまう産業や心理的な被害も考えると一概に悪だとは決めつけることができない、釈然としない気持ちになった。

また双葉町役場旧庁舎周辺にはある看板が設置してあった。看板には「ウソで塗り固められた双葉町へようこそ、放射能公害を復興というウソで双葉町民を騙している姿をご覧

ください」と表記してある。私はそれを見て大きな衝撃を受けた。双葉町はもっとも復興が遅れている街と言われており、被害を大きく受けた場所だ。私は除染作業員の方々の活躍によって復興しているという美談を信じすぎてしまっていたのではないかと一度自分自身を疑った。帰還困難区域が少しずつ解除されていく地図上での復興とは違い、住民の感情のこもった主張に初めて触れた体験だった。直接被災していない私は、この声も一つの声として真摯に受け止めなければいけないと感じた。



写真7：双葉町役場旧庁舎周辺にある看板

## 2日目：中間貯蔵を見て

中間貯蔵事業情報センターは政府が全額出資している中間貯蔵・環境安全事業株式会社が運営しているセンターだ。直前に見た住民による主張とは異なる展示が多くあった。福島第一原発事故に伴う除染で発生した除去土壌のうち、放射性セシウム濃度が1キログラムあたり8,000ベクレル以下の土壌のことを復興再生土と呼んでいる。それらは2045年3月までに福島県外での最終処分することを国の責務と位置付けている。もし、福島を訪れて初めにこの展示を見た場合私はおよそ残り20年で汚染された土壌が福島から取り除かれ、安全な場所を取り戻すことができると思っていただろう。木幡さんや中筋さん含め住民の意見の中には復興再生土として県外に持ち出す必要性のなさを指摘するものがある。むしろ中間貯蔵施設として管理し、太陽光発電の設備を構える方が合理的なのではないかという意見もある。もちろん印象として中間貯蔵施設をなくし、最終処分が完了したとなれば復興が進んだ印象を受ける。1日目の調査を踏まえて中間貯蔵事業情報センターの展示を見ると復興が進んでいるのではなく、住民の声を十分に反映せず福島に暮らしていない人たちに復興が進んでいる印象を与える設計になっているのではないかと感じた。もちろん正しい情報も多くあったが、中間貯蔵事業情報センターの情報だけが福島の全てではない、一側面であることを感じた。



写真 8：中間貯蔵事業情報センターの展示

中間貯蔵施設を実際に目の前で見た。訪問前までに思い描いていたイメージとは異なり、少人数での作業だった。特殊な装備や機械などを用いて行うものだと思っていたが実際は黒い袋に土を詰めて運搬している様子がかがえた。作業員の方々はふるさとを安心・安全な場所にするため、あるいは経済的な理由で日々作業されていると思っている。私が一目見て感じた印象は途方もない数のフレコンバッグが広がっているということだ。放射線の線量が他の地域と比較して変わらない程度であると展示には記してあるがひとたび山の中に入ると放射線量の高い区間があった。放射線量を検知する計測器の数値は上がり、大量に並んでいるフレコンバッグの景色を見て復興が進んでいるとは到底言うことができなかった。



写真 9：双葉町熊川の中間貯蔵施設

2 日間の体験を双葉屋旅館に戻った際に同じ部屋の 2 人にも話した。様々な立場の情報を知ることになり、整理するだけで精一杯だった。おれたちの伝承館での展示や双葉町役場旧庁舎周辺のある看板にあったように福島第一原発事故からの復興は完全にはできておらず、住民には大きな負担を強いることになっていた。原子力発電所を設置すること、再稼働させることに賛成するかといった鋭い議論をした。3 人とも口を噤んだ。環境負荷や供給安定性、化石燃料に依存しない点など利点があることも承知だが「明るい未来のエネルギー」とはもう呼べない。

### 3 日目：浪江町請戸護岸を歩いて

請戸小学校周辺に、ソシオグリーンパーク請戸というゴルフ場が 2026 年 8 月 29 日にオープンした。同行していただいた中筋さんは、もし住民の声を十分に反映していたらこのような施設は作られていないだろうと語った。まちづくりという観点では被災以前の姿に

戻る道をたどっているだろう。しかし、住民の心が癒えるわけではない。元に戻すことが復興ではないとこの地に来て感じた。

さらに、この請戸護岸周辺では福島第一原発事故の影響を大きく受けており事故発生からしばらく捜索活動ができなかった。通常の災害であれば物資を届けたり捜索活動がすぐに行われるが、放射線の影響で思うように支援することができない。食事を十分に摂ることができなかった人たちが命を落とすこともあったそう。元々家が並ぶ住宅街であったという話を聞いたが現在の姿からは想像もできなかった。福島第一原発事故の発生から15年が経過し、復興の美談を聴いてきた私が目の当たりにした景色は、虚しさが広がっていた。



写真10：請戸護岸周辺

### 3日目：伝言館にて

安斎育郎さんのご案内のもと伝言館を見学した。原子力工学のなかでも放射線防護学を専門とされている方で、技術的な視点を持っていた印象を持った。専門的な知見から福島第一原子力発電所は非常時には制御できないのではないかと指摘されたそう。行政や司法、東京電力株式会社にそのことを掛け合ったそう。しかし、原発を推進する流れが強く主張を聴いてもらえなかった。原発の影響は「医学的」「心理的」「社会的」なものがあるとしている。1日目の原子力災害伝承館での語り部をはじめとする住民による悲痛の叫びをたくさん目の当たりにしてきた。安斎さんのお話に納得する部分が大きい感覚に気が付いた瞬間だった。

安斎さんのお話を伺い印象的だったものが2つある。1つ目は、政府が発表する避難者人数の解釈には十分注意を払わなければいけない点である。ふるさとを離れた人たちがその先で家を購入した場合や公営住宅に住んだ場合、避難者人数として数えられないという点である。直感的には被害者人数と避難者人数がほぼ同数のように感じるが実際は、避難者人数以上に被害を受けていることがそこから推測される。2つ目は、福島第一原子力発電所の中には燃料デブリと呼ばれる事故で溶け落ちた核燃料と周囲の金属やコンクリートなどの構造物が混ざり合った物質が多く残っているという点だ。量にして880トンあると言われており、2025年には0.2グラムしか取り出せていない。仮に毎年1キログラム取り出したとしても880年かかる計算だ。聞いた途端復興が終わっているはずはないと確信に変わった。

展示の中でもひととき目立っていたのは写真11の右に記載しているポスターだ。これは、1978年10月26日(原子力の日)のポスターで原子力を恐れる人間はアレルギーであると宣伝した。現在の文部科学省の前身となる科学技術庁が作成したものだ。原子力を恐れることはアレルギーという未来のエネルギーとは異なる角度での表現にさらに驚きを感じた。私は、政府による製作物としてふさわしくないと率直に感じた。



写真11：伝言館の展示

### 3日目：考証館

考証館の館長である里見喜生さんのお話をお伺いしながら見学した。40件の裁判の事例が記載された展示があった。責任の所在が国であったり東京電力であったり、はたまたそのどちらでもない判断されるケースがあった。私はこれらの住民の主張の多くを知らなかった。伝言館の館長を務めている安斎さんもこうした原発反対運動の末、事故が発生した。住民の声が届かないということを痛感する展示であった。

里見さんは展示やお話の中で木村汐風さんを扱っていた。放射線の影響により搜索ができず、悲惨な姿見つかることになった。木村汐風さんの父親である木村紀夫さんは見殺しにしてしまったという感覚に苛まれたそうだ。私は居たたまれない気持ちになった。家を津波で無くし、避難先では被ばくが伝染すると事実とは異なる偏見の目で見られる生活を想像し、言葉を失った。

里見さんは、公営の施設と私営の施設が提供している情報の差異に目を向けるといいと言ってくださった。どこことなく感じていたモヤモヤがその一言で少し整理できたと感じた。復興が進んでいるという情報と現在も苦しんでいるという情報の葛藤が生じていたがそれぞれの立場の目的を鑑みるとその差異が生じることは明白だ。

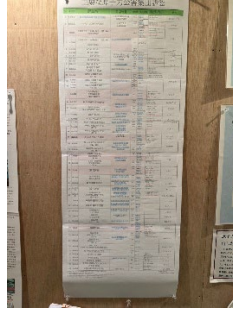


写真 1 2 : 考証館の展示

## さいごに

机上学習をしているとどうしても影響力の強い情報を目にする機会が多い。復興庁をはじめとする公的機関の情報に多く触れるため、福島第一原発事故から 15 年が経過した現在復興が進んでいると思っていた。しかし、政策に反映されない住民の声、被災された方々の心の傷が残っていること、現場と世間のイメージの乖離が生じていることなどの現状があると痛感した。

被災された方々と私たちでは「伝える」役割や手段が異なるのではないかと感じた。私たちは福島第一原発事故を直接経験していない。それは、現場と世間をつなぐ立場になることができるということだ。被災状況を語るができなくても、媒体による情報の内容の違い、公的な情報によって埋もれてしまう小さな声を拾うことができる。

双葉屋旅館の前で集合写真を撮ろうとした際に通りかかった方が「お写真お撮りしましたか」と言ってくださった。この温もりを紡いでいくために、私は後世に福島第一原発事故を伝承していく。

## 26 年度福島県沿岸部フィールドワークに参加して考えたこと

実践人間科学領域 M1 植村藍也佳

今回のフィールドワークでは、福島県沿岸部の様々な場所を訪れ、福島第一原発事故の現状を学んだ。

二泊三日の旅のなかで考えたことを、以下に報告としてまとめたい。

### 1.オペレーションの混乱

様々な体験談を聞かせていただく機会や、事故を扱った展示を見る機会を得てまず感じたのは、オペレーションの混乱である。

東日本大震災・原子力災害伝承館の語り部の方によれば、避難当時、避難所がどこもいっぱいに入れなかったり、そうした状況について役所に問い合わせても「わからない、何も言われていない」と言われたりなどの体験があったそうであった。加えて、そもそも、どこが原発から何キロ圏内なのかもあまりわかっていなかったという。避難指示の出していない地域でも放射線量は高かった中で、避難したくても、避難するかどうか、するならどのような手段でどこに避難するか、は各家庭に委ねられてしまっていた状況であったことが伺えた。また、町民への情報共有も十分になされておらず、水素爆発を最初はただの火事だと自身の周囲は思っており、全国ニュースで事実を知ったという出来事も語ってくださった。情報共有に関していえば、自宅が未だ帰宅困難区域となっている木幡さんによれば、放送で避難指示が出されたため、一部の高齢者などは避難指示を認識できなかったという。また、原子力災害伝承館での展示においても、避難当時の様子が伝えられていた。避難指示に該当する地域はバスで急遽避難となったが、重病の患者にとって厳しい環境での乗車となり、バスの中で亡くなる方もいたという。

混乱の影響が及ぶのは、災害当時だけではない。災害後も様々な出来事が起こっており、それらの問題は現在も継続している。問題は今回記すものだけではなく、紙幅の関係から印象に残った3点を伝える。まず印象的だったのは、畜産農家への打撃である。被害にあった地域には畜産農家が多かったそうだが、避難しながらでは家畜の世話をすることは難しく放置せざるを得なかったり、さらに放射能による汚染により殺処分せざるを得なかったりなどの現実があった。土地も家畜も失い、多くは畜産を廃業せざるを得なかったという。おれたちの伝承館にて展示している、和紙で作られた餓死した牛の作品は、こうした出来事を物語っている。次に、中間貯蔵施設の問題である。福島県沿岸部は、汚染された土を指定の場所に集め、放射能が出ないような処理を行うことで除染を進めてきた。こうした中間貯蔵施設の土地は現地の人々から買い取ったものであるが、原発事故を経て現地の人々が住む場所を失ってしまったことがその存在によって現れている。双葉町は多くの土地が中間貯蔵施設となっているが、町がひとつなくなってしまったとい

う現実がその背景にはある。加えて、公には 2045 年には汚染された土を県外へ移動させるとしているが、本当にできるのだろうか、という嘆きをフィールドワーク中多くの方から聞いたのも印象的だった。最後に、誰もいなくなった町の現実である。この点については、2 節目にてまとめて報告する。

その他に今回印象に残ったのは、富岡復興メガソーラー・SAKURA への訪問と、請戸小学校付近への訪問である。前者については、変電所が小さいために、発電した電気が余ってしまい、放出するしかない状況がある。後者については、地元民の反対にも関わらず、震災遺構である請戸小の隣にゴルフ場が建てられたのだという。両者とも、復興のイメージへの貢献が重視され、現地の人々の状況や感情がきちんと検討の俎上に乗せられていたのか疑問であった。



↑おれたちの伝承館の展示



↑積まれたフレコンバッグ



↑メガソーラー



↑右が請戸小学校、左がゴルフ場

## 2.更地になった町と再開発

双葉町は現在、古い建物、更地、新しい建物が混在する状況である。未だ解体されていない建物、建物が解体されたり田んぼが管理されなくなったりして更地となった土地、廃炉作業員や移住者のために建てられた新しい建物、という内情である。

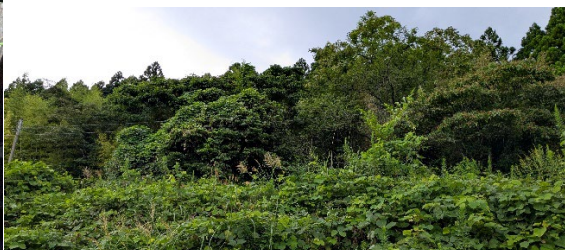
町内を大型車で走るなかで、廃墟や、解体予定の建物をいくつか見た。大きく立派な建物である図書館や役所も、除染のため解体するしかない。また、管理されなくなった田んぼは、一見ただの平地のように見えるが、よく見るとあぜ道だったであろう段差がわかる。長者原という場所では、住民の多くは避難の末戻ってきておらず、建物も解体されかつての町の面影は消えつつあるなかで、記憶を残すための石碑が建てられていた。帰宅困難区域となっている木幡さんの自宅前にも訪問した。木幡さん宅は、写真撮影地点から本来は見えていたそうだが、草木が生い茂り現在は見えない状況となっていた。湯本にある原子力災害考証館では、大きな写真が展示されていた。元の町と解体されていく町とを、同じストリートから撮影したものだ。それなりに奥行きがあった町が、更地になっていることが分かりやすい。場所は小高だが、今回宿泊した双葉屋旅館の女将さんも除染の苦勞を語ってくださった。現在は営業再開しにぎわっているが、再開前に建物の全改修が必要だった。ボランティアが1日に1人しか入れなかったり、野生動物が集まっていたり、困難な状況の中2年をかけて現在の状態にこぎつけたそうだ。

そのような状況の一方で、除染された土地には、新しい建物が建っている。原子力災害伝承館は現代的で綺麗な建物である。新築住宅も点在しており、一見再開発が進んでいるように見える。しかし、メガソーラー・SAKURAの従業員の方によれば、作業員が暮らすことを想定された町であり、一般的な家庭にとっては買い物がしにくい・する場所がないなど、居住するには課題がある町だという。また、立ち入りが制限されている場所や放射線量が高い場所が未だ点在している。

廃炉作業も終わりは見えていない。はじめは数十年で終わるとしていたものの、百年単位でかかることが判明したことを私が知ったのは、宝鏡寺伝言館館長の安斎先生の講話を聞かせていただいたときである。イノベーションコースト構想に基づいて再開発が進む一方、まだまだ課題があると言えるだろう。また、故郷を失った人々の心情に関する問題は、政府主導での復興や金銭の支給では解決しきれない部分である。災害後も問題は継続していることを、改めてこの節でも伝えたい。



↑ 空き家



↑ 木幡さん宅前



←長者原の石碑



←考証館の写真展示



↑『更地』 おれ伝展示作品。解体し山砂をかぶせた後返還される土地を描いた。実際の山砂を絵具に使っている。



↑原子力災害伝承館



↑新築住宅

### 3.まとめ：他人事と捉えないこと

私は、生まれてから現在までずっと関西に住んでおり、原発事故当初の報道も記憶にはあるものの、遠い場所の他人事としてこれまで捉えてきた。しかし、現地を訪れて一番強く感じたのは、かつては福島もまた人々が暮らす普通の町だったということであった。そうした普通の暮らしが災害により脅かされ、現在も続く問題となっていることは、他人事とは思えなかった。災害が起きる可能性や、原子力の取り扱いの問題が存在する以上、原発事故と関係のない地域は日本にはないのではないかと思った。今回のフィールドワークの経験を活かし、今後もこうした問題について考え続けていきたい。

## 福島フィールドワーク

人間科学研究科臨床心理領域 M1 LI Yongze

### 双葉駅に到着

朝 5 時に起きて、静岡から東京方面を通して双葉駅へ向かった。11 時 11 分に着いたが、改札を出る時に自動改札機がなくて驚いた。切符は記念に取っておいた。



写真 1 双葉駅

最初は、自分がイメージしていた日本の駅とは違うと感じた。駅には人がたくさんいて、周りには飲食店があちこちにあると思っていた。ここでは、生活感がゼロと言ってもいいかもしれないと思った。先に着いていた同じグループのメンバーと、駅前のイオンで食べ物を買って食べた。意外だったのは、OIC の近くのイオンより少し安かったことだ。

ほかのメンバーを待つ間、双葉町図書館にも行った。Google マップで検索すると観光名所と書かれていたので、わくわくしながら向かったが、入口には蜘蛛の巣がたくさんあり、中も散らかっていた。小幡さんによると、もう取り壊すことが決まっていて、本もほかの場所へ移したらしい。

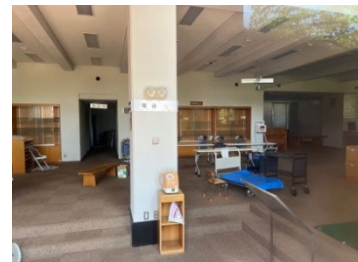


写真 2 双葉町図書館の入口と内部

図書館の前には大きな広場があった。ネットのロコミには、春には桜がきれいで、夜の景色も楽しめることや、祭りも開かれるということが書かれていた。



写真3 図書館周辺で見た風景

## 旧駅舎と東日本大震災 原子力災害伝承館

私たち以外にも、ほかの学校の生徒たちも来ていた。高校生だろうか。後から、ここへ見学に来ると、補助金が出ることもあるらしいと知った。それが本当にいいことなのか、考えているうちに分からなくなった。つらい記憶を次の世代に残すべきなのか、それとも今の世代で終わりにした方がいいのか。正解はないと思う。自分の中では、どこかで残した方がいいのだろうとは思っている。

駅の近くに戻って、話しながらまだ来ていないメンバーを待った。自転車が3台しかなかったのだが、奇跡的に4台目が戻ってきた。全員がそろってから、すぐそばの旧駅舎へ行った。「どこでもドア」のような「夢の扉」があった。少し意味が分からなかったが、ひとまず写真を撮った。



写真4 旧駅舎の扉と訪問者の記録

日本だけでなく、世界のいろいろな国から来た人たちが足跡を残していた。私は中国人で、大阪に住んでいて、今回は静岡を通して来たので、3か所にシールを貼った。ここを出た後は、自転車で東日本大震災・原子力災害伝承館へ向かった。



写真5 伝承館と周辺の風景

館内には当時の記録がたくさん残っていて、20 キロ圏と 30 キロ圏の話を初めて実感できた。ただ、この記録を書いている今、どうして 20 キロと 30 キロだったのだろう、と疑問に思っている。30 キロ圏外に避難すれば安全なのか。31 キロの場所にいる人は大丈夫なのか。何を基準にして、どんな科学的な根拠から決めたのだろうか。

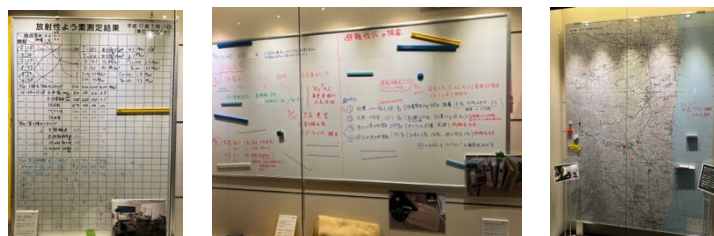


写真6 館内に残された当時の記録

## 原子力のある日常と防護服

東日本大震災・原子力災害伝承館の展示を見ると、双葉町や大熊町など、原発の周りの町では、原子力が暮らしの一部になっていたように見えた。私の思い込みかもしれないが、教室に貼ってある習字の作品といえば、「整理」や「清潔」のような言葉を思い浮かべる。でも、ここの小学生たちは原子力について書いていて、作文にも原子力の話が出てきた。

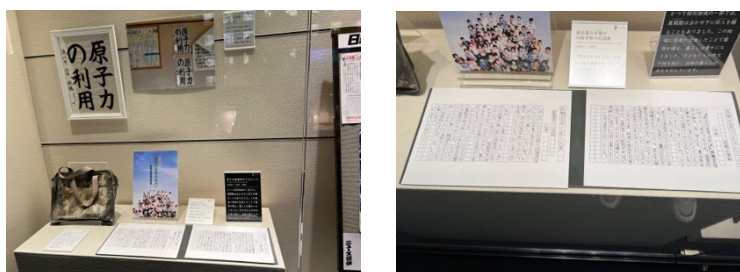


写真7 原子力を題材にした書道や作文の展示

館内にあった「原子力明るい未来のエネルギー」という標語の写真が、強く心に刺さった。明るい未来をつくるための原子力だったはずなのに、今は町の呪いになってしまっているように感じた。



写真8 原子力明るい未来のエネルギーという標語

予定どおりなら、翌日は防護服を着て、小幡さんの案内で帰還困難区域にあるご自宅へ行くことになっていた。私は、防護服を着れば放射線を防げると思っていた。事故が起きた頃から、みんなが着ていたからだ。でも、中筋さんの説明では、この服は放射線そのものを防ぐものではなく、土やごみなどが体や服に付かないようにするためのものだそうだ。正直、これだけで身を守るには、あまりにも頼りないと感じた。



写真9 防護服と汚染土を入れる袋の展示

汚染土を入れる袋を実際に見るのも初めてだったので、スタッフの方に、ずっと聞きたかったことを聞いてみた。「この袋は、汚染土専用の特殊な袋ですか」。返ってきたのは、インド産と中国産の丈夫な袋だという説明だけだった。

## 高村春美さんのお話

その後、「福島第一原子力発電所から25キロに住む一人として」というテーマで、高村春美さんのお話を聞いた。高村さんは14年間、同じ出来事を話し続けていて、全国でも語り部の活動をしているそうだ。

お話の中では、福島県は雪の多い会津、中通り、海沿いの浜通りに分かれ、それぞれ文化にも違いがあると教えていただいた。高村さんが暮らしていた南相馬市は、浜通りにある。2006年に合併した鹿島区、原町区、小高区が、今度は原発から20キロ圏、30キロ圏という区切りで、また分けられてしまったそうだ。

避難の話では、子どもたちと向かった小学校が遺体安置所になっていたことが印象に残った。ガソリンが足りなくても、避難できる場所を探さないといけなかった。子どもたちが避難できる場所を何とか見つけた後、高村さんは一度、働いていた老人ホームへ行ったそうだ。

職場の館内放送で水素爆発のことが流れたが、すぐに間違った情報だとして取り消されたと聞いた。その後、14時の全国ニュースで初めて知ったそうだ。12日から放射線量はすでに高かったのに、専門家は一時的に上がっただけだと説明し、詳しいデータがあっても公表されていなかったという話もあった。

福島から避難した人たちが、避難先でいじめや差別を受けることも、よくあったそうだ。福島ナンバーの車にはガソリンを入れないと言われたり、子どもたちが学校で居場所

を失ったりした。

高村さんは、話の中で具体的な会社名を出してはいけないという、行政からの圧力もあったと話していた。それでも、東京電力の名前を出さずには話にならないと、強く話されていた。

伝承館を出てから、また少し町を見て回った。やはり、生活感がほとんどないと感じた。見かけたスーパーは駅前のイオンだけで、買い物ができる場所やコンビニも、とても少なかった。

## おれたちの伝承館

この日、最後に見学したのは、中筋さんのおれたちの伝承館だった。事前学習で先輩たちのレポートを読んだり、ネットで調べたりして、今回のフィールドワークで一番気になっていた場所だった。



写真 10 おれたちの伝承館

小さな施設だったが、公的な施設ではなかなか見られないものがあり、アート作品も多かった。一番衝撃を受けたのは、死んだ牛の骨と、かじられた木の柱だった。急いで避難する時、飼い主はすぐに戻れると思って、牛をそのまま残していったそう。でも、避難生活が長くなり、牛は限られた場所で食べるものがなくなって、柱をかじっていた。飼い主が戻った時には、骨しか残っていなかった。



写真 11 牛の骨とかじられた柱 そして残された未来の文字

先ほど伝承館で見た「原子力明るい未来のエネルギー」の標語についても、面白い話があった。除染でこの標語が付いていた看板を取り外す時、ほかの文字は簡単に取れたの

に、「未来」だけがどうしても取れなかったそう。それで、その部分を切り取って、おれたちの伝承館に残すことになったという。

おれたちの伝承館の展示物は、どれもきれいだった。機会があれば、また行ってみた



い。



写真 12 館内で見た作品

## 双葉屋旅館での夕食と友子さんのお話

朝からずっと外にいたので、夕食前に男子メンバー3人と一緒にお風呂を楽しんだ。双葉屋旅館の料理は本当においしくて、家庭的な感じもあった。食材をどうやって安定して仕入れてきたのか、少し気になった。



写真 13 双葉屋旅館の夕食

食事の後、福島大学から来た先生や学生の皆さんと一緒に、女将の小林友子さんのお話を聞いた。お兄さんが戻るつもりはなかったので、友子さんが2005年に旅館を引き継いだそう。お客さんへの接し方は、子どもの頃から自然と身に付いていたそう。2007年にはお兄さんも戻り、3年ほど一緒に過ごした。2010年には旦那さんが退職し、一緒に旅館をやるようになったと聞いた。

震災の時、旅館には大きな津波は来なかったが、水が入ってきたそう。3月12日から避難し、避難所が人でいっぱいだったので、一時は車の中で待っていた。16日に名古屋の息子さんのところへ向かい、その後、1年ほど避難生活を送ったそう。福島市は、ほかの地域に比べて被害が少なかったという話もあった。

避難生活では、1か月ほどで持っていたお金がなくなり、年齢のこともあって、ハローワークに行っても仕事が見つからなかったそう。そのため、地元に戻って生活しようと考え始めたそう。

2013年から2015年にかけて旅館の修理をしたが、20キロ圏内だったので、工事で出たごみをその外へ出せず、片付けが難しかった。本来なら半年で終わる工事に2年かかり、2016年7月12日にまた営業を始めたそう。その頃に約1,000人が戻り、今は約3,000人になったと聞いた。20キロ圏と30キロ圏の区切りをめぐるのは、お金や健康の問題があり、生活に困る人も増えた。それでも、自分たちの故郷だから、地元の人たちの力で元氣を取り戻していくというお話だった。

放射線を測る機械についても話を聞いた。当時使っていた日本の測定器では9.99までしか表示できず、ウクライナから99.99まで測れる機械が150台送られたそう。また、2012年に行われたウクライナの大学との共同研究では、植物の油には放射性物質が移らないと分かったそう。今は菜の花やひまわりなどの油を使い、石けんやボディソープを作っているそう。

## 朝食と車の窓から見た風景

朝7時、食堂で朝食をいただいた。こんなに伝統的な日本の朝食を食べるのは初めてだった。メロンが本当においしかった。



写真 14 双葉屋旅館の朝食

この日は、帰還困難区域にある小幡さんのご自宅へ行く予定だったが、行けなくなった。その代わりに、小幡さんの話を聞きながら、車で地域を見て回るようになった。

最初は車を止めずに進んだが、車の窓から見えた景色は、とても衝撃的だった。ふと思い出したのは、好きなゲームの『NieR:Automata』だった。今の社会が何かの災難で滅びて、その瞬間のまま止まっているように見えた。



写真 15 車の窓から見た建物や時計



写真 16 移動中に見た風景

帰還困難区域の看板が立ち、通れなくなっている道があちこちにあった。監視カメラが付いていたり、警備員が立っていたりする場所もあった。



写真 17 帰還困難区域への立入りを制限する表示

## 町の中にあった看板

最初に車を降りて見たのは、東京電力の独身寮の近くにある大きな看板だった。正直に言うと、内容を完全には理解できなかった。ただ、お互いの意見がぶつかっていることは、よく伝わってきた。それぞれが自分の立場や意見を、ここに来た人に伝えようとしているのだと思った。



写真 18 東京電力の独身寮近くで見た掲示



写真 19 同じ場所にあった大きな看板

移動中には、たまたま、ある建設会社の宣伝看板も見かけた。希望がいっぱい詰まった内容だと感じたが、周りの廃墟や帰還困難区域の看板と並んでいるのを見ると、何とも言えないもやもやした気持ちになった。



写真 20 移動中に見かけた建設会社の看板

## 慰霊碑と町並み そして中間貯蔵への不信感

次に行ったのは、長者原の慰霊碑だった。地震の直接の被害で亡くなった人だけでなく、故郷に帰れないことを苦に、自ら命を絶った人もいたと聞いた。残念ながら、この日は雨だったが、翌日、中筋さんがここでドローンを飛ばし、上から見た中間貯蔵施設などを見せてくださった。



写真 21 長者原の慰霊碑

大熊町では、中筋さんが撮った、建物が取り壊される前の町の写真を、その場所で見せていただいた。中筋さんの説明がなければ、写真に写っている場所に自分が立っているとは思えないほど、町は変わっていた。復興と言っても、もう元には戻れないのだと強く感じた。写真が横に長く、その場ではうまく撮れなかったので、ここには、最終日に原子力災害考証館で撮った写真を載せた。



写真 22 原子力災害考証館で撮影した町並みの記録

移動中、中筋さんが持っていた放射線測定器が時々鳴った。その後に行った中間貯蔵事業情報センターでは、見学していて違和感があった。ここで初めて、2045 年までに福島県汚染土を県外で最終処分するという話を聞いた。いろいろな分野で使うことも書かれていたが、具体的にどう処分し、どの分野で使うのかは、私が見た展示からは分からなかった。

最初から最後まで「復興」「復興」と繰り返して、具体的にどうするのかは書かれていないように感じた。民営の施設で紹介されていた内容と比べると、ここにはうまくいったことやいい結果ばかりが並んでいて、地元の人がどれだけ苦しんでいるのかは見えてこなかった。



写真 23 袋にあった長期仮設 3 年対応の表示

袋のラベルを見て、さらに驚いた。「長期仮設 3 年対応」と書かれていたからだ。長い期間使われる袋なのに、3 年という表示で大丈夫なのだろうか。中間貯蔵施設や処分のやり方をますます信用できなくなった。

## 大熊町での昼食と中間貯蔵施設

お昼は、大熊食堂で醤油ラーメンを食べた。おいしかった。



写真 24 大熊食堂と醤油ラーメン

食後は、事前学習で調べていた「学びの森」を車から見て、その近くの山にある公園で写真を撮った。周辺では、測定器の数値がそれほど高くなく、さすが学校の近くだと思った。ただ、山を登り、測定器を地面に近づけると、数値は上がった。山の上には、思いがけず古い歴史のある碑もあった。



写真 25 高台からの景色と山の上にあった碑

中間貯蔵施設に積まれた袋を遠くから写真に撮った。袋がびっしりと積まれていて、量の多さに驚いた。写真を拡大すると、袋には重さや除染をした会社の名前、放射線量などが書かれていた。よく見ると、放射線量は結構高いように感じた。



写真 26 土を保管する袋と袋に書かれた情報

でも、見えた範囲では、作業員は誰も防護服を着ていなくて、マスクをしていない人もいた。防護服では放射線そのものを防げないと知っているからなのだろうか。何だか危ないと感じた。

## 太陽光発電と道の駅 旅館での夜

その後、富岡町のメガソーラーを見学した。こんなに大きな太陽光発電所を自分の目で見るのは初めてだった。原発事故によって汚染された土地に安全な再生可能エネルギーの発電所ができている。そのことに、少し感動した。



写真 27 富岡町のメガソーラー

帰りには道の駅なみえに寄って、お土産を買った。私はそばを使ったビールを買い、大阪へ戻った翌日に友達とおいしく飲んだ。さっぱりしていて、普通のビールより苦味が少ないように感じた。





写真 28 そばを使ったビール ひまわり油 イナゴのおつまみ

ひまわり油の瓶にあった「放射性物質検査済み」という表示が印象に残った。どんなにおいしそうに見えても、検査で安全が確認されていても、世間の偏見はあまり変わらないのだと感じた。イナゴで作ったおつまみもあって、ここには昆虫食の習慣があるのかもしれないと思った。

晩ご飯は豪華な日本料理だった。本当においしくて、特に焼き魚は今まで食べた魚料理中でも少なくともベスト3には入ると思う。夜には、ルームメイトから福島産の桃味のポテトチップスをもらって食べた。最初は、袋が大きい割に中身が少なすぎると思った。味はそれほど濃くなく、ふんわりとした桃の味だった。



写真 29 旅館の夕食と桃味のポテトチップス

夜はみんなで集まって、振り返りの会をした。やっぱり、一人ひとり見ているところが違って、学んだことも感じたこともずいぶん違っていた。みんなで話してみると、こういう見方もあるのだと気づいた。

## 朝食と旅館の花 請戸の海

三日目の朝ご飯には、ずっと楽しみにしていた桃があった。菜の花の油をサラダにかけて食べてみたが、普通においしかった。そして、昨日も今日も味噌汁が最高だった。



写真 30 最終日の朝食

食事の後、車に乗る直前に、女将の友子さんが育てている花を見た。下の写真のうち、左と中央の花は友子さんが植えたものだ。右の花は、津波で運ばれた種から育ったらしく、除染の時にも残って、生き延びた強い花だった。

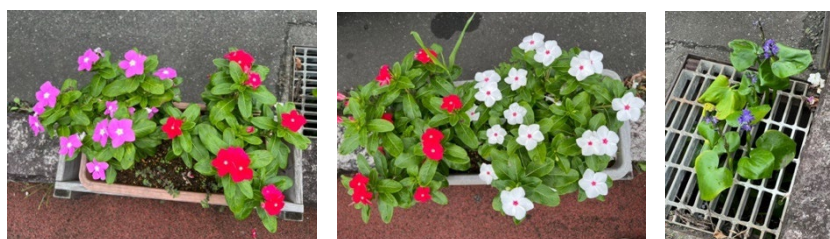


写真 31 旅館前で見た花

この時期の稲穂もきれいだった。



写真 32 移動中に見た稲穂の風景

中筋さんの案内で、浪江町立請戸小学校の前の海岸へ向かった。防潮堤に立って今の海を見ていると、それほど波を怖いとは感じなかった。でも、震災の時の津波の高さは約15.5メートルで、今立っているところのおよそ2倍の高さだった。数字だけではあまり実感できないが、実際にその場所に立って想像してみると、怖くなった。



写真 33 請戸の海と小学校 その場で残した記録

## 宝鏡寺の伝言館といわきでの昼食

次に、檜葉町の宝鏡寺にある伝言館へ行った。2020年に個人のお金で建てられたと聞いた。館内には、約50年にわたって原発に反対してきた活動の資料やヒロシマ、ナガサキ、ビキニなどに関する資料がたくさん残されて展示されていた。庭には広島からの「非核の火」が静かに灯っていた。



写真 34 宝鏡寺の非核の火と不戦決議の掲示

安齋先生から、今も後悔していることについてお話を聞いた。原発事故を防ぐチャンスが全くなかったわけではないのに、防げなかったという後悔だった。特に印象に残ったのは2005年に東京電力に警告していたのに、東京電力が対策を怠ったため、心配していた事故が起きてしまったという話だった。

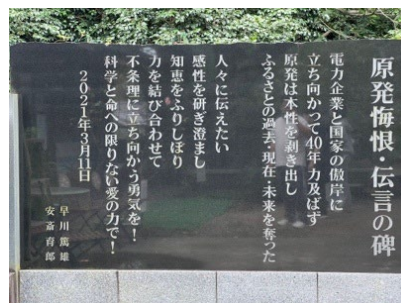


写真 35 境内にある原発悔恨 伝言の碑

伝言館を出た後、いわき湯本温泉の古滝屋でそばを食べた。いわき市に入ると、いつも見慣れている日本の生活感が戻ってきたように感じた。



写真 36 古滝屋でいただいたそば

## 原子力災害考証館で感じた怒り

食べ終わった後、旅館内にある原子力災害考証館を見学した。ここについても、事前学習の時に少し調べていた。先輩たちのレポートに出てきた木村さんご家族のお話を里見さんから聞き、実際の展示を自分の目で見た。



写真 37 原子力災害考証館の展示

館内では汐風ちゃんが見つかった時に身に着けていたという遺品のマフラーに触れさせていただいた。ふわふわしてなくて、ごわごわしていた。その手触りから、長い間、雨や風にさらされていたことが伝わってきた。

そして、このフィールドワークに参加して初めて怒りを感じた。それは裁判の結果についての展示と原告である被害者の方々の陳述書を読んだ時だった。

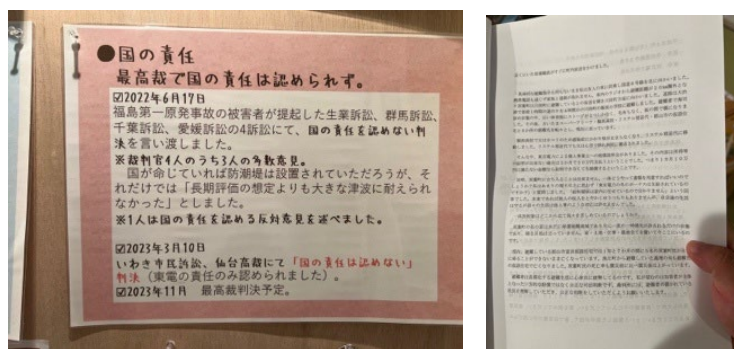


写真 38 裁判の結果についての展示と原告の陳述書

陳述書には被災する前の思い出がたくさん詰まっていて、昔の幸せな暮らしがよく伝わってきた。でも、あの日から、命が脅かされただけでなく、元の生活にはもう二度と戻れない。その上で、賠償の金額を見るとあまりにも無責任で、被害者を侮辱しているように感じた。読めば読むほど、言葉にできないほどの怒りが湧いてきた。

## 旅の中で出会っただるま

今回のフィールドワークでは、行く先々でだるまを見かけた。大きなものから棚に並ぶ小さなものまであり、色も表情もさまざまだった。置物だけでなく、壁や看板にも描かれ

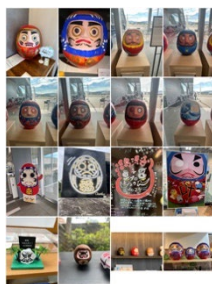
ていた。写真を並べてみると、この三日間で思った以上にたくさんのだるまに出会っていたことに気づいた。

双葉町では江戸時代から約 300 年にわたってだるま市が続いてきたという。昔から人が集まるきっかけになっていたこの行事は震災後も避難先で続けられている。今では双葉だるまが町の復興のシンボルにもなっている。

昔は新年のにぎわいの中にあっただるまに、今はもう一度町に人が集まってほしいという願いも込められているのだと思う。そう考えると、あちこちで見かけただるまが昔の双葉町と今の双葉町をつないでいるように感じられた。

だるまの写真を見返していると、旅館でいただいたご飯や友子さんが育てていた花も思い出した。大変な経験をしながらも、そこで暮らし、私たちを迎えてくださった人たちがいた。だるまに込められた復興への願いも、こうした日々の暮らしとつながっているのかもしれない。

これからこの写真を見るたびに、現地で聞いた話や自分がその場で感じたことも一緒に思い出したい。また福島を訪れた時にはだるまの周りにどんな暮らしがあるのかも見てみ



たいと思う。

2026 年度 東日本・家族応援プロジェクトに参加して  
臨床心理学領域 M2 杉本峰香



車窓から見える旧双葉町役場庁舎の時計

昨年度のプロジェクトに参加させていただいてから、私の心の片隅にはずっと福島があった。建物が撤去され、草木が生い茂ったもの寂しい景色、あるいはその景色と大規模な最新施設が織りなす不調和、被災された方の壮絶な体験を語る声など、忘れようもない。しかしながら、日常に戻りそういった記憶が確かなものとして残っている反面、福島の原因事故について自分が知ったことが、全体のほんの一部でしかないことにも気付かされた。調べれば調べるほど、知らないことや難しい話が出てきて、あるいは、さまざまな情報や意見が相対化され、時に拡散していき、全容をつかむどころか、かえって何がなんだか分からなくなってきた。時には「原発は必要でしょ。」とあつけられかんと言われた。原発で人生がめちゃくちゃになった人たちのことを思い出した。でも、悪気があって言っているわけではないだろう。ただ、そんな簡単に言っただけられる話なのだろうか…。その過程で無力感を覚えたり、時に直接の当事者でもないのに傷ついたりもした。次第に自分のポジショナリティに疑問を覚え、情けないことに、だんだんと自分は何がしたいのか分からなくなってしまっていた。

そんな中、思いがけず先生方から今年度のプロジェクトのご案内をいただいた。“プロジェクトに参加することで、少しでもこのモヤモヤが晴れるかもしれない”と個人的な目論見も抱きつつ、二度目の参加をさせていただいた。現地に行ったからこそ、直接話を聞いた

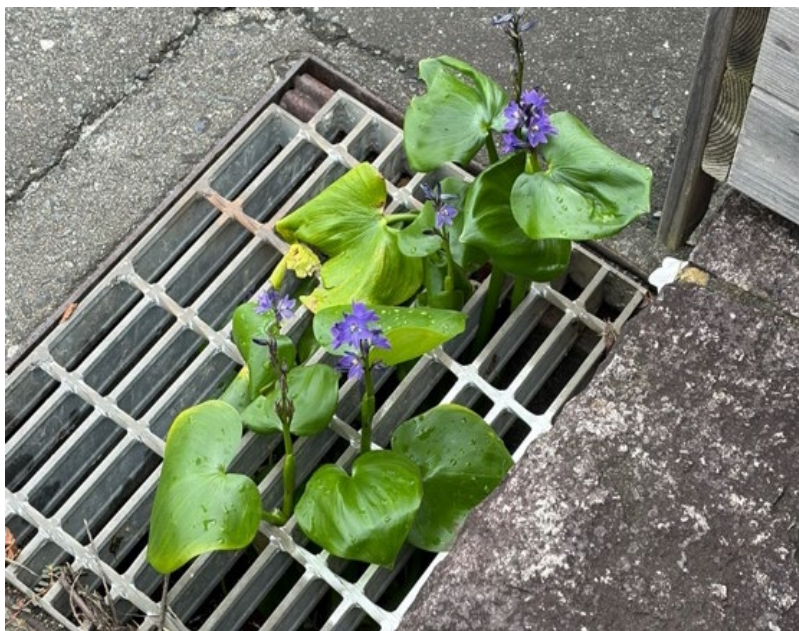
からこそ、感じ取れたことがあった。“自分は何がしたいのか”という自分本位な視点からになってしまうが、ここに考えたことを残しておきたいと思う。なお、活動の具体的な内容や学びについては、全て記すと膨大な量になってしまうため、他のメンバーからの報告に委ねることとする。

まず、私は、福島原発事故や原発問題について、一人で正しい一つの真実を考えるのではなく、みんなの意見を聞いて迷い続けたいと考えた。“みんな”とは、震災や原発事故の当事者だけでなく、原発が存在する日本で生きる人全てが当てはまる。また、“迷い続ける”というのは、傍観するという意味ではなく、自分なりの主張は持ちつつも、さまざまな考えをうけてそれを変化させていくという主体的な営みを意味する。このように考えたのは、プロジェクトに参加してみて、原発事故に関してあまりにも“臭いものに蓋をする”状況が多いように感じたためである。具体的には、電力会社や公的機関によって、放射能のリスクがある部分は伝えられない、語り部の話がコントロールされる、復興の正の側面だけアピールされるなどが挙げられる。もちろん風評の問題や、ある程度希望的に復興事業を進めていかなければならない側面はあるだろう。現場で自分なりに出来ることを考え、復興事業に取り組んでいらっしゃる方の存在もある。しかしながら、大きな力の働きとしては、世間の人々を根本的な問題から遠ざけている状況があるのではないかと感じざるを得なかった。また、情報を受け取る側の視点で見ると、心理的な防衛として情報を否認・回避したりする場合や、そもそも“アクセスしやすい”情報だけが全てになってしまう構造があると考えられる。例えば、壮絶な被災経験を語った語り部に「自分の思っていた話ではなかった」との感想が寄せられたというエピソードを聞いた。聞き手が期待していた文脈が既にあったということ、そして、その文脈で原発事故が語られなかったことを残念に思った、ということである。また、特定復興再生拠点区域に引っ越したある方に、少なからず存在する被曝リスクが伝えられた際も、「聞くんじゃなかった」と話を聞いたことを後悔されているご様子だったそうだ。このように、防衛反応と情報アクセスの困難さの二つがかけ合わさって、原発事故の影響について向き合いづらい状況が生まれている。恥ずかしながら、私自身もこのプロジェクトに参加するまでは、福島の原発事故の問題はほとんど解決してきていると思い込んでいた。このような状況だからこそ、一人で考えるのではなく、さまざまな立場から話を聞いて、どのような背景で問題が生じたのか、そしてどのような問題が今も続いているのかを知っていく必要がある。これからの原発の稼働自体にも、賛成/反対の極端な二項対立だけが存在するとみなすのではなく、その理由や程度も多様であることを念頭に、なぜそう思うのかを聞いてみることに意味があると考えた。また、意見を聞く中で、私自身もこのプロジェクトで経験したことや学んだことを伝えていくことができる。原発の話になったとき、こんな風に話せたら、“臭いものに蓋をする”ような状況を少しずつ変えていけるのではないかと感じる。

また、みんなで話すことと共に、忘れたくないと感じたのは、「アドボカシー」の大切さである。みんなで話そうと語ることで、それこそ見落とされてしまうのは、力の差であ

る。“力”にはいろいろあると思うが、平たく言うと“誰しものが自分の意見や経験をスラスラと語れるわけではない”ということである。宮地（2007）の環状島モデルのように、トラウマティックな現象の中心にいた人ほど、身体的・社会的・心理的に語ることに大きなハードルを抱えている。一人では意見を表明することが難しい人が、議論に参加することができるようになるためには、他の誰かが擁護・代弁する必要があるだろう。あるいは、そもそも語ることや、語った後に受ける社会的反応が苦痛を伴うものであるために、語らないという選択も尊重されるべきである。皮肉なことに、「語られなかったこと」は存在しているにもかかわらず、語られないが故に「語られなかったこと」が社会的には存在していないかのようにみえてしまう可能性がある。そのため、見落としている声がないか振り返ったり、また、声を振り絞っている人を見かけたら、自分も一緒に声を上げることができよう。このプロジェクト自体も、まさに「証人（witness）」として、その役割を果たしている。日常的にも、臨床心理を学んできた自分だからこそ、この視点を持って原発事故についてこれからも考え、伝えていきたい。

2回目のプロジェクトに参加し、昨年度お会いした方にもう一度お会いできたこと、そして新たな出会いがあったことを大変嬉しく思います。参加するたびに新しい発見や学びがあるプロジェクトであると実感しました。お話を聞かせていただいた皆さん、そしてこのプロジェクトを企画・アテンドしてくださった先生方、中筋純さんに感謝の意を表します。



今年は花を咲かせた双葉屋旅館のミズアオイ

#### 引用文献

宮地 尚子（2007）．環状島＝トラウマの地政学 みすず書房

## 福島原子力災害フィールドワーク実習 活動報告

### 臨床心理学領域 M2 辻 萌

#### はじめに

東日本大震災及び福島原子力発電所の事故から 15 年の月日が流れました。今回のフィールドワークに参加するまでは私自身、テレビやネットニュースで流れてきた情報以上のことは、この複合災害についてほとんど何も知りませんでした。今回、このような機会をいただきあの日福島で何が起きていたのか、この 15 年で福島で何が起きたのかということを、片鱗ではありますが知ることができました。その中で、『復興』という言葉が何を指すのかということや福島の人たちが失ってきたものの意味について深く考えさせられました。この 3 日間、私が目で見て、感じたことを少しばかりではありますがお伝えできればと思います。

#### ● 9 月 2 日

#### 東日本大震災・原子力災害伝承館

福島県の双葉町に到着し、まずはじめに東日本大震災と原発事故に関する展示がされている、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れました。原発事故前から、福島がいわゆる原発の「安全神話」とともに生活し、原発が安全で、福島になくてはならないものとされてきた歴史があったことを知りました。そこには国と福島の関係性が色濃く映し出されているように感じられ、事故はあの瞬間起こったことだけではなく、これまでの歴史も含めての事故なのではないかと考えるようになりました。

原発事故のその後についても展示が行われているブースがあり、特に印象に残ったのは原発事故の健康被害についての展示でした。展示ブースで最も目立つように展示が行われているのは、「こどものころ」に関することでした。原発事故で被曝し、それによって健康被害を受けている方が多いことは想像に易いですが、それよりも心理的な問題に目を向けさせることで、身体的な被害に意識を向けないような展示が行われていると感じました。



図 1 健康被害の展示

## 語り部 高村さんのお話

伝承館では、震災以後長く被災体験の語り部活動をされている高村美春さんのお話を聞きました。当時の混乱が鮮明に伝わってきたと同時に、原発事故によって福島の人々が多くのものを失ったこと、特に情報が伝えられなかったことが住民の避難や生活に大きな影響を及ぼしたことを知りました。中でも印象に残ったのは、情報の不足と地域分断についてのお話です。

高村さんは家族や職場の方々を避難させるため、福島県内を何度も横断されました。しかし、原発の水素爆発や被曝の危険について住民には十分な情報が伝えられておらず、「知っていたら行動は変わっていた」とおっしゃっていました。適切な避難が妨げられただけでなく、避難先でも「福島から来た人」として差別を受けるなど、原発事故が人々を二重、三重に傷つけたことを知りました。

また、事故後の賠償金の違いによって、3つの地域が合併してできた南相馬市が分断されたというお話も印象に残りました。本来なら被災経験を共有し支え合えたはずの地域で、原発事故によって人々のつながりやコミュニティまでが分断されたことから、原発事故の被害には目に見えない「人とのつながり」の喪失もあるのだと実感しました。

私は双葉屋旅館まで高村さんに車で送っていただいたため、講話後もお話を伺うことができました。その際、原発事故から15年が経った現在も、福島の人々が各地で声を上げ続けている一方、その主張が十分に認められていない現実についてのお話がありました。街並みは綺麗に整備されていましたが、災害は今なお続いていること、「復興」とはどのような状態なのかということを深く考えさせられました。

## おれたちの伝承館

フェンスに貼られた奥の写真の展示が印象に残っています。壁にキツネや、家屋の写真が展示されているのですが、その前にはフェンスが置かれています。キツネはまっすぐにこちらを見ており、私はもっと写真を近くで、まじまじと見たい気持ちが湧き上がってきましたが、フェンスに遮られて写真を思うように見ることはできませんでした。原発事故を受け少しでも故郷を離れざるを得なくなった人は、このときの私よりももっと複雑な気持ちをもって、自分の故郷に想いを馳せているのだと感じました。特に帰宅困難地域に自宅がある人は一時帰宅は可能ですが、未だに自由な帰宅はできません。慣れ親しんだ土地で好きに暮らせないことの不自由さがあることを展示を通して感



図 2 天井に飾られた大型の絵画

じました。

また、天井に大きく飾られていた絵にも非常に心を動かされました。どうしてもかはわからないのですが、強いエネルギーを感じました。2階に上がると、鮮明に絵を見ることができ、エネルギーの原動力がわかりました。そこには原発事故や震災そのものを彷彿とさせるような描写がありました。その反面、中央の色味はどこか希望を感じさせるようなもので、福島を支えたいと思う人のメッセージのように感じました。これまでの福島の歩みを映し出したような絵を見ることが、震災以前までにあった福島はどのような光景だったのかということに興味を持ったと同時に、震災以前の姿がいつ再び見ることができるのかわからないことを非常に残念に思いました。

### 白髭さん

おれたちの伝承館に併設の建物で福島中の放射線量の測定を進める白髭さんにお話を聞きました。白髭さんは事故以前に福島原発で長く働かれており、その時も放射線の測定を行われていたそうです。退職後もボランティアで福島県内の放射線量の測定を進める白髭さんは、現在も測定を行っている理由を「原発で飯食ってた懺悔」と話されました。原発が建ったことは国主導のことであり、どのように運営していくのかということを決めたのは福島で作業員として働いておられた方ではないのに、誰も悪くないのにどうしてこのような気持ちで過ごし続けなければならないのかとやるせない気持ちが湧きました。その裏には原発を建てることと切っても切り離せない「中央―地方」という社会構造があり、その社会構造が人々をそのような気持ちにさせているのではないかと考えると、相手にするものが大きすぎると、無力感に苛まれました。

### 双葉屋の女将・小林友子さんのお話



図 3 双葉屋の前に咲く花

夕食後、今回のフィールドワークで2泊させていただいた、双葉屋旅館の女将・友子さんご自身のお話を聞きました。友子さんは、被災体験、避難のお話、双葉屋をどのように立て直したのかなど、震災発生からこれまでの歩みについてお話ししてくださいました。

中でも、「これまでどう『復興』が進んできて、これからどう進めていくのか」というお話は、非常に興味深いものでした。『復興』を進めていくにあたり、友子さんのお話の中には、福島のこれまでをどう残すかという課題が軸にあると考えます。放射線量を下げて、再び人が住めるような街を作る

るには家を取り壊す必要がある一方で、双葉屋旅館のある小高地区の人々は、「家を取り

壊せば、帰る意味がなくなる」と取り壊しに賛成する人はいなかったそうです。また町づくりを進めるにあたって、「見慣れた家を取り壊して。若い人たちにとってはこれでいいのかなと思うけど、でも残して欲しい」と世代間にある町づくりへの思いの違いなども語られました。友子さんはこの15年間で様々なコミュニティ作りにも尽力されてきましたが、その理由として「人が来て「ここ」を見てくれる、「ここ」が消えないように残したい。「ここ」が忘れられないように」とお話しされていました。

友子さんのご経験や想いを聞き、一言に復興と言っても人によって何を成せば復興なのかということは異なることを感じました。現在の状況やその人の置かれている立場によっても復興のビジョンは異なることを実感し、これまでの福島とこれからの福島をどのように両立させ、住民たちが納得する形で地域としての「復興」を進めていくのかということを考えることが1つの大きな課題として今浮かび上がっていると考えます。

## ● 9月3日

### 双葉町・大熊町（木幡ますみさんの案内）

2日目は、木幡ますみさんのご案内のもと、双葉町・大熊町を見学しました。

特に印象に残ったのは、一つのまちの中に、新しく開発された空間と、時間が止まったような空間が混在していたことです。線量計の音が鳴り、木が鬱蒼と茂った道を抜けると、突然 CREVA おおくま（クマ SUN テラス）が現れました。駅周辺には綺麗な復興住宅が建てられている一方、帰宅困難区域では家屋が取り壊され、石塀だけが残された土地も多く見られました。

大野駅付近では、中筋さんに震災以前の町の様子を撮影したパノラマ写真を見せていただきました。木幡さんが写真を指差しながら「この家にはこんな人たちが住んでいた」と説明していただきましたが、実際に目の前に広がる場所にはその家も人々の生活の痕跡もありませんでした。かつての生活が跡形もなく失われ、それを感じさせない新しいまちが構築されていることに、驚きとショックを受けました。



図 5 中筋さん撮影のパノラマ写真

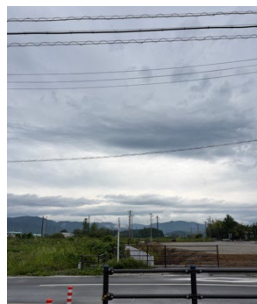


図 4 図 3 の写真に収められた場所の現在

また、帰宅困難区域の田んぼや木幡さんの生家を見せていただき、原発事故が地域のコミュニティや産業にも大きな影響を与えたことを知りました。田んぼは手入れができず、かつて農家同士で行われていた交流も失われています。また、放射線量が高いため山の手入れや林業も続けることが難しく、地域の産業や、そこに根付いてきた文化の継承までが阻まれていることに気がきました。

さらに、原発建設当時の地域の反応についてもお話を伺いました。過去の大津波の経験から、建設するのであれば地域の歴史を踏まえて安全性を考えるべきだという声があったものの、建設費用などの理由から十分に反映されなかったそうです。このお話から、原発事故を単なる自然災害として捉えるのではなく、事故以前から存在していた地域の声や歴史にも目を向ける必要があると感じました。



図 6 この裏に木幡さんの生家が

### 中間貯蔵事業情報センター

大熊町の中間貯蔵事業センターで、復興再生土について多くを知りました。除染の過程で、土は除染できないため、これまでの土を取り除いて新しい土を入れており、取り除かれた土が復興再生土と名付けられていること、また、復興再生土は 2045 年までに福島県外で最終処分するよう法律で定められているということもここで初めて知りました。特に復興再生土の処分については法律で定められているからといって、福島に中間貯蔵されているフレコンバッグ 1000 万袋をすべて処分できるに足る数の受け自治体はあるのかと率直に疑問に思いました。一方でこれらの復興再生土は、現在もとは住宅のあった双葉町と大熊町の一部に置かれており、一刻も早く処分する必要があるとも感じました。

### メガソーラー・変電所見学



図 7 あたり一面に広がるメガソーラー

原発事故ののち、再生可能エネルギーを盛り立てようとメガソーラーが政府主導で行われていた。今回は、富岡町のメガソーラー発電所に見学に行かせていただきました。

まず、この発電所の成り立ちに大変驚きました。富岡町の住民から元は住宅の建っていた土地を借り、太陽光発電を行っているということです。ここで発電された電力の売電が保障されているのは 20 年間のみで、20 年終了後の目処は立っていないということで、借りている土地がどうなるのか、設置された太陽光パネルがどうなるのかもわからないということでした。はじめは福島のためになる

と思われていたかもしれないメガソーラーですが、ここに来て持続可能性の問題が浮き彫りとなっていると感じました。また、福島の人たちがメガソーラーによって土地を、暮らしを搾取されるというような構図が再現されており、この社会構造からどうすれば抜け出すことができるのか、二重にも三重にも福島の人たちが傷つけられているのではないかと非常に考えさせられました。

## ● 9月4日

### 浪江町

朝は浪江町のほうへ向かいしました。請戸の海岸で車をおり、どこまでも広がる海を眺めながら、2011年の3月11日にこの海の向こう側から津波がきたと思うと、胸が苦しくなりました。後ろを振り向くと広い土地にポツンと震災遺構の請戸小学校があり、南側には小さく見えるF1の煙突がありました。震災当時はたくさん家も立っていて、ここに人々の暮らしがあったとは信じられないほどに海が、土地が広がる景色でした。

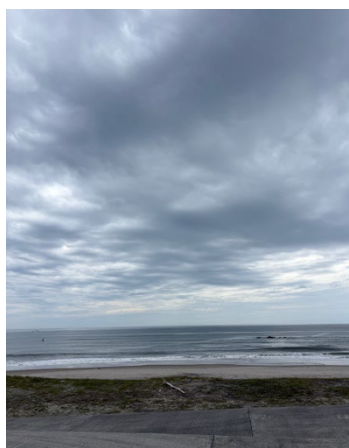


図 8 浪江の海



図 9 請戸小学校と植え込み

中筋さんは震災当日の出来事を教えてくださいました。震災が起き、福島第一原発が水素爆発を起こした日、この辺りには11日中に撤退命令が出たそうです。津波の影響で行方がわからなくなっていた方の搜索は11日夜には打ち切れ、行方不明者の搜索が開始されたのは5月。津波の被害だけならば助かったかもしれない命が原発事故のせいで助からなかったと聞いた時、ここに取り残された人たちはどんなに心細かっただろうと思いました。

東日本大震災と福島原発事故の複合災害と言われることもあるが、本当に災害と一括りにされてよいのかと思う現実がそこにはあったと考えます。このように私が感じたことを伝えることが、今回のFWに参加した私の責務であることを、請戸の景色が一層実感させてくれました。

また、一度双葉町・大熊町に戻り、中間貯蔵されている復興再生土を見学した。見渡す限りのフレコンバッグで、これを本当にあと20年で全国に移動させることができるのか

と、途方もない作業であるように感じられました。

### 宝鏡寺 伝言館

宝鏡寺にある伝言館で、安齋先生のお話を聞いた。安齋先生は原子力を長年研究されており、原発建設の初期の段階から反対派として活動されてきた。今回のお話の中でも原発事故が起きたことを「悔しい」「ふざけるな」とおっしゃっていました。エピソードの中でも特に印象に残っていることは、公聴会で主婦が「広島の高校生がこんなに元気なんだから、平和用の原発は恐るるに足りない」と意見を述べ、これが述べられることを行政は事前に知っていたにもかかわらず通したという話です。日本は原爆で唯一の被爆国と言われ、非核を主張してきているのに原発推進が真っ当かのように述べられ、まるで筋の通っていない発言が罷り通っていたことに衝撃を受けました。やはり歴史的に見ても原発事故において政府の責任は問われるべきなのではないかと強く感じたエピソードでした。原発に本気で向き合っただけで、先生のお悔しさが伝わるお話でした。また、先生と先代の和尚が作られた碑石に刻まれた「感性を研ぎ澄まし」という文言は、まさに今回のフィールドワークに求められていたことの1つだったのではないかと感じ、心を動かされました。



図 10 安齋先生と記念碑

### 古滝屋 原子力災害考証館

考証館の中央には、震災で亡くなったゆうなちゃんの遺骨が発見された当時の現場が再現されています。実際に亡くなられた方の写真とともに遺品を見るのは初めてで、私にとって非常にショッキングな展示でした。原発事故がなければ、ゆうなちゃんが発見されるまでに5年6ヶ月もかからず、もっと早く家族のもとへ帰ることができたのではないかと思います。悲しさや怒りが込み上げてきました。また、原発をめぐる裁判の実際の書類も展示されており、これまで多くの人が長い時間をかけて原発事故と向き合ってきたことが伝わってきました。

展示を見た後、古滝屋の里見さんから話を伺いまし



図 11 考証館の展示

た。里見さんは、「原発は災害ではなく、事故、最近は事件と呼んでいる」とおっしゃっていました。また、問題を追っていくと「一部の人の利権＞弱い立場にある人」という構造が見えてくるともお話しされました。特に印象に残ったのは、「福島なりの豊かな暮らしがそこにはあったのに、国策によって地域が消滅した」という言葉です。農業や地域のつながりの中で築かれてきた暮らしは、除染が進み人が住める場所が戻ったとしても、元の形には戻りません。双葉町や大熊町での見学を通して感じていた地域の「豊かさ」が、文化や伝統とともに失われてしまうことに悔しさを感じました。

里見さんのお話からは、一つの出来事をさまざまな側面から捉えることの大切さを学びました。「国側の施設だけでなく、被災者側の施設も見ること、偏りなく考えられる」というお話も印象に残っています。今回の FW では複数の被災経験者のお話を伺いましたが、その経験を単純に「被災者側の体験」とまとめることはできません。世代や地域、立場によって異なる経験があることを知り、多様な視点から問題を捉える重要性を学びました。

### ● 3 日間を通して

フィールドワークを通して、感じた原子力災害における被害のキーワードの中に「アイデンティティ」と「コミュニティの繋がり」があると感じました。原発事故が福島の中のさまざまな規模のコミュニティを分断させ、福島の人からアイデンティティを取り上げてしまったのではないかと考えました。

キロ圏や、帰宅困難かそうではないかという分断の仕方は、原発事故によって明確に生まれたものであるが、復興の進め方や福島との関わり方（仕事など）など、副次的に生まれた心理的なレベルでのコミュニティの断絶に至る所で起きているのではないかと考えます。それは福島の人がこれから生活をしていく精神的な基盤を、原発事故が奪ってしまったことに他ならないと感じました。また、これらのことが福島の人たちが長年福島の地で培ってきたアイデンティティを傷つけてしまっているのではないかと感じました。

このような問題に対して、私なりにできることはやはり「伝える」こと、忘れないことなのではないかと考えます。私は今回福島で多くの人に出会って、その人がどのような思いで生きたのかという道を継承していくことが「伝える」ことの最も重要な意義の 1 つなのではないかと感じました。

最後になりましたが、このような貴重な経験をさせていただき、このフィールドワークでお世話になった全ての方々へ御礼申し上げます。

**「福島フィールドワーク」に参加して**  
**博士課程後期課程 河野暁子**

9月2日の午後から福島フィールドワークが始まった。南相馬市小高にあるおれたちの伝承館館長の中筋さんが、行程を組んでくださった。まず、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、語り部の高村美春さんの語りを聴かせていただいた。原発事故避難者である高村さんの語りからは、事故当時の緊迫感と避難にまつわる苦悩がひしひしと伝わってきた。その後、南相馬市小高にあるおれたちの伝承館へ行き、アート作品の展示を観賞した。どの作品も、原発事故の喪失と痛みを静かに訴えているように感じた。また、おれたちの伝承館に併設されている放射能測定所では、白髭所長のお話をうかがった。放射能濃度の基準を教えていただき、復興再生土壌の問題点も理解することができた。双葉屋旅館では、夕食後の女将の小林友子さんからは、事故後の避難から現在の小高での活動までをうかがった。チェルノブイリにも訪問し、精力的に活動されている姿がとても心に残った。

9月3日は大熊町の木幡ますみさんが車に同乗し、双葉町や大熊町のガイドをしてくださった。原発のある町に長く住んでこられた方ならではのお話を、たくさん聴かせていただくことができた。午後には、富岡町のメガソーラーを見学し、猪狩洋一さんのお話をうかがった。広大な敷地に並べられたソーラーパネルに圧倒された。巨大な送電線も見学し、ここで作られた電気が遠く関東まで運ばれていることを想像した。

9月4日は中筋さんの案内で、小高や浪江町請戸を見学し、中間貯蔵施設近くの長者原を訪ねた。慰霊碑が建立されており、亡くなられた方々はどれほど無念だったかと思った。楡葉町の宝鏡寺へ移動し、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館を見学した。館長の安斉先生お話をうかがった。原発は核兵器ともつながっており、核そのものの脅威を訴える展示であった。最後に、いわき市にある古滝屋の原子力災害考証館を訪れ、館長の里見さんのお話をうかがった。原発事故で多くの方が亡くなっており、何が原因で誰の責任なのかを考えさせられるお話だった。

限られた時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。今後も原子力災害に関心を持ち続け、できるかぎり福島へ通い、人々の声に耳を傾け、調べ、周りの人へ伝え、自身の行動を決めていきたい。最後に、フィールドワークでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。